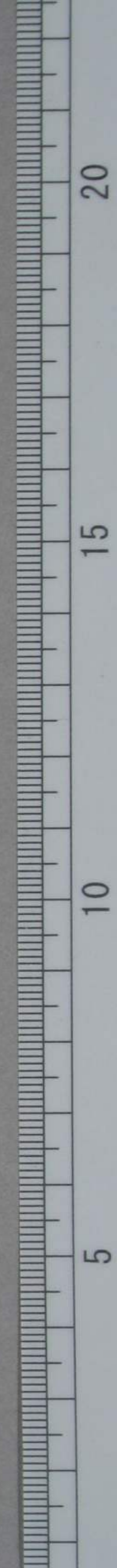


快 樂 詩 人



快樂
詩人

アナクレオン 全

郎著



快樂詩人

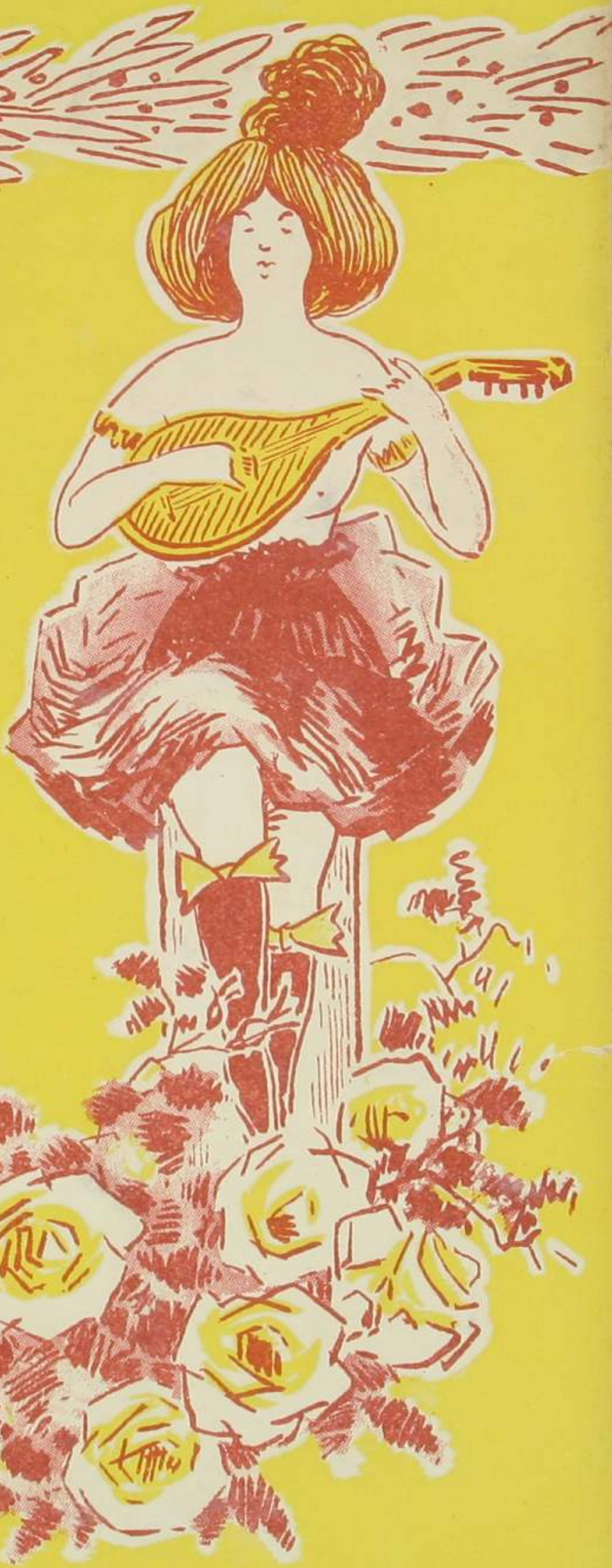


快樂詩人

アナクレオン 全

郎管





本お雁者ちりく著

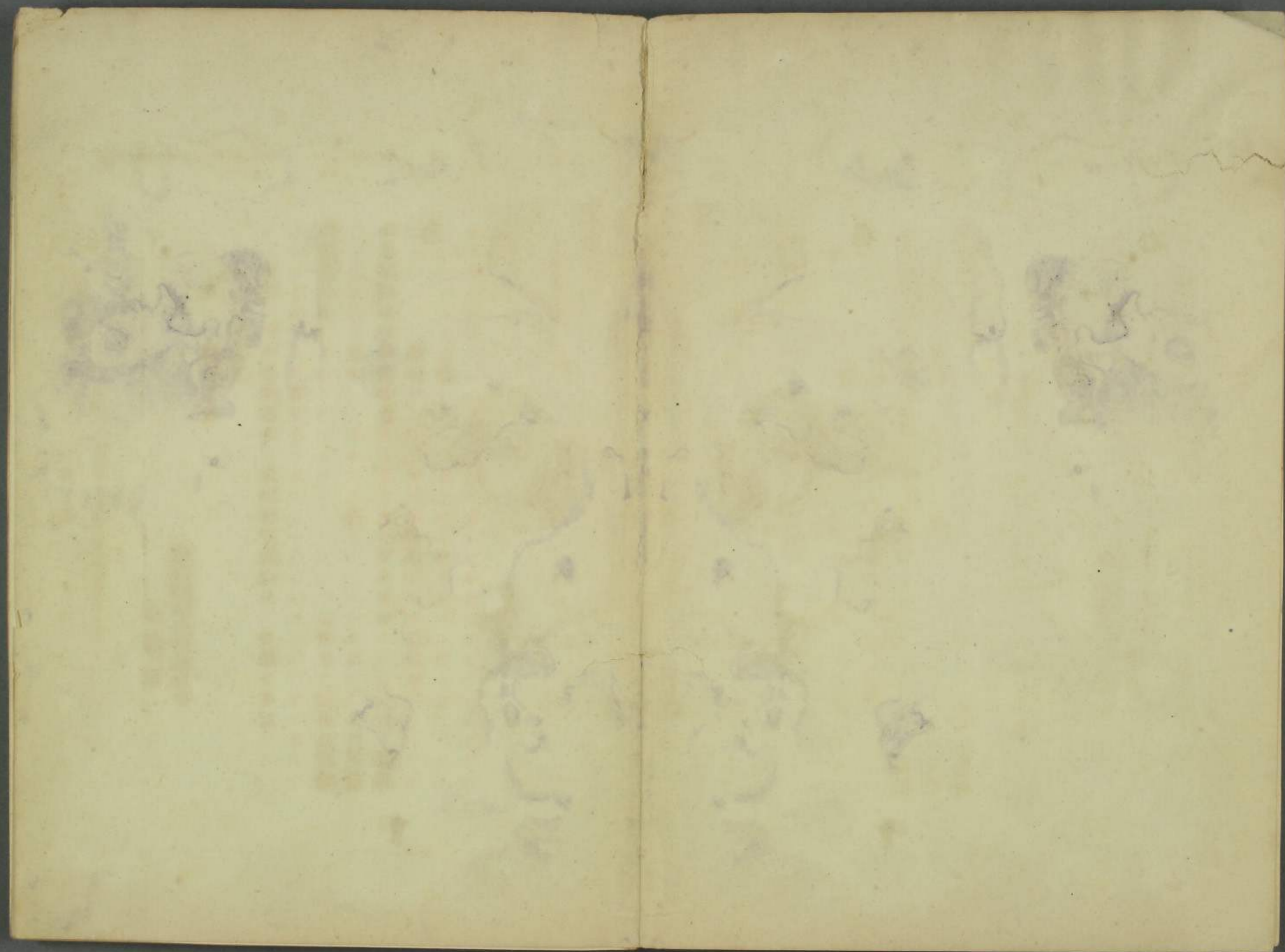
快樂
詩人

アナクレオン

附
大伴旅人
楊子
快樂之我







序
言ふ勿れ、快樂は卑しきものなり、食色の欲は下等なりと。人は飲食に由りて生き、好色に由りて種族の滅絶せざるを得るなり。一は生存せしめ他は膨脹せしむ。天の此等諸欲に至大の快樂の感を附隨せしめたるは豈意味なきとやらんや。アナクレオンは「歡樂し宴飲し、相愛し、美を頌せんが爲めに生を享けたり、之れ天の命なり」と歌ひ、快樂を以て神聖としたるクレシア太古の詩聖なり。楊子は快樂哲學を説きたる支那古代の哲人なり。共に快樂の説に就て聽くべきなり。吾人は文學界、哲學界、倫理界に、此詩と此哲學とを紹介せんが爲めに本書を作る。

明治三十四年十二月

東京芝浦の寓居にて

木村 鷹 太郎



詩人あり歌ひて曰く、

『吾人は歡笑し宴樂し、相愛し、美を味はんが爲めに
人世に出でたり、これ天の命じたる人生の道たるな
り』

と。吾人果して樂しまんが爲めに生れたるや否や、答へ
能はざるなり、何となれば吾人は生れんとして生れたる

非ずして偶然に生れたるものなれば、其生るゝに當て目的なきは當然たればなり。然りと雖吾人生れて感覺あり、目は視んことを欲し耳は聽かんことを欲し口は味はんことを欲し、鼻は香がんとことを欲し、體は自由ならんことを欲するは事實たるなり。一言以て之を蔽へば、人間は快樂を求め、苦痛を嫌ふものと謂ふ可きなり。かの『吾人は歡笑し、相愛し美を樂しまんが爲めに人生に出でたり』と歌ひたる者を誰とかなす。曰くグレンシア古代の詩人アナクレオンなり、而して吾人の今此に紹介せんとする所は即此詩人たるなり。

歡笑、飲樂、愛情、優美、實にこれ人間の有する快樂中、其の最も本原、單純、普通の者なり。之を以て此種の快

樂は最もよく人間多數の快樂となり、又最も強く求めらるゝ所たるなり。然と雖所謂高尚を以て自任せるの人は、一概に此種の快樂を罵りて下等なりとし、殆ど以て惡となし、又之を輕視して顧ることなし。これ大なる誤謬たるなり。何となれば、此くの如きの快樂を求むるは人間多數の心情の實質にして、又これ人心の一大事實たればなり。豈輕視すべけんや。殊に人事の現象中、其最も大なるものは、實に是等快樂の満足を得んとして起るものにして、又其所謂精神的、理想的の快樂と稱する所のものも、實は此種の快樂が其基礎となれるものにして、此種の快樂なき時は、世事殆ど意味なく色なきに至らんとを悟るに於ては、一概に此種の快樂を排斥し輕視するは

寧ろ愚にして不親切の所行と謂はざる可からざるなり。吾人は今日の社會に於て、又吾人の心の組織に於て、古昔の人なるアナクレオンの如き快樂を行はんとする者に非ず、又行ひ得べきにも非ずと雖、人間多數の此種の快樂を求むるの大傾向あるは今も猶ほ古の如きなり。而して吾人はアナクレオンの歌を以て、人類の聲として聽かんと欲するものなり。願くは高尚なる人よ、又所謂道徳家を以て自任せる人々よ、昔し奸臣が君主の耳目を蔽ひて下情を上達せしめざりしが如く、此人間の至性より出づる所の聲を打消し、以て眞正博量の哲學者、政治家及び倫理學者等の耳に入るゝことを拒む勿れ。是等の聲は願くは哲學者の耳に入りて人情の自然を研究するの材料

となれ、政治家の耳に入りて爲政の參考となれ、倫理學者の耳に入りて道徳の標準を規定するの正知を與へよ、社會學者及び歴史家等の耳に入りて人事生起の主要なる原因を教ふるものとなれ、又厭世家の耳に入りて其厭世主義の全くは眞理に非ざることを知らしめよ。余は今更此處にアナクレオンの快樂歌を叙べんとすと雖只これ一箇の文學として見るに止まり、吾人此主義を取れりと謂ふに非ず、又アナクレオンを藉りて快樂主義を唱へ、倫理學或は心理學上の意見を述べんとするものにも非ず、是を以て余は是非取捨に就いては別に論ずる所あらざるなり。而して余の之を叙ふるに當りて用ゐたるアナクレオンの詩集は、英國詩人トーマスマーアの英譯

にして、又余の引用せる所は、單に其大意を譯出したるに止まるものとす。加之余の不文禿筆は、アナクレオンの美を寫すと能はざるは言はずして明かなりと雖、又以て一言し置かざる可からざるなり。故に余の爰に引用せる所は、只これアナクレオンの骸骨に過ぎずとして見られんことを讀者諸君に希望するなり。

アナクレオンは名家の末なるが如しと雖、其の傳記に就きては、吾人知ること甚だ少し、之を以て今得て其詳傳を作る可からざるなり。アナクレオン、紀元前六世紀の頃に小アジアの西岸サモス島のテオス府に生る。此地は氣候溫暖にして草木繁茂し、美麗なる花は爛漫として咲き、香氣馥郁、萬物盡く豊艶なり。當時アテーナイとサ

モス島とはヒッパルカス及びポリクラテースの治下に在りて其隆盛及び文華を競ひ居たる頂上にして、アナクレオンはポリクラテースの知己となり、宮庭に出入し、樂しき生活を爲せりと雖、宮中の腐敗には感染することなく、其愛情的の詩歌を以てポリクラテースの心を和げ、其臣下に對して仁慈の心を起さしめたることありと謂ふ。

ヒッパルカスは時のアテーナイの君主なり、最も文雅の氣に富み、初めてホメロースの詩を集めて之を出版し、アテーナイの大祭日に當て美辭家をして之を歌はしめたる人なり。而して其宮庭は詩人天才の集會所にして、アナクレオンも亦必ず此處に在りしとなるべし。ヒッパルカス嘗て船を裝ひ、アナクレオンを小アジアより招待す、ア

ナクレオン之を諸し、多くの詩人等と共にアテーナイに至りしことあり。

アナクレオン家に在るや、常に愉快なる日月を送り、又た其主義の詩を歌へり。其詩は美麗なり、輕妙なり、溫和なり、宛も小アジアの氣候の如し。其快樂を主義とせるより、道德の點に就きては或は如何はしきことなきに非ずと雖、アナクレオンの時に於ては、又其地に於ては、道德未だ嚴なるを要せざりしなるべし。然りと雖も吾人は決してアナクレオンを以て下等なる人物、或は敗徳者なりと云ふこと能はざるなり。其善良、溫和、愉快なる心情を有し、以て人と共に樂しみたるが如きは、實に人間らしき人と謂ふべく、後人稱して「聖人アナクレオン」

と謂ふも亦た道理なきに非ざるなり。

二

アナクレオン、生活及び理想の選定に就きて考へたること有りしが如し。グレシアは古へより英雄豪傑の輩出したる所、其名赫々として青史に輝やけり。嗚呼勇者となりて名譽を揚げ、又詩人となりては其勇壯を歌はんか。然りこれ勇壯なり、戰爭は吾人の神氣をして昂騰せしむ。アナクレオン一度び英雄詩人とならんとしたること有り、之を以て屢々古代の勇者を題とし、其の勇ましき働きを琴に合はせて歌ひたり。然りと雖、彼れの境遇と其の性質とは、彼をして戰爭詩人たるよりも溫柔快樂の詩人とならしめたり。嘗て歌ひて曰く、

「我れ琴」を鳴らして烈火の如き名高き人の事業を歌ひ、其高き音に合はせてアトロイスの子の戦場に進み、チリアのカドモスの遙かの地に徧歴いし時、如何に勇者戦ひ、國民斃れたるやを歌はんと欲し、琴掻き撫でしこと其幾度なるやを知らず。然るに糸の響き忽ち消え、我琴は勇ましき曲に響くを好まずして曰く『我糸は只戀にのみ響くべし』と。我れ此柔弱なる音聲を憤はり、未來の名譽に燃え、一層高尚なる調べを以て、戦争なるかな、戦争なるかな、我が琴は實に戦争のみに適せりとなし、乃ちヘーラクレス及びアルキデースの榮名を歌ひ、消え入る音を再び強く掻き撫でたり。然るに片意地なる我が

琴は優さしき聲もて曰く「さらばよ、戦場名譽の大將さらば、戦争呐喊の響よさらば、我糸は他の優さしき事にのみ響かん。只愛のみは樂しかり、名譽の夢よいざさらば」と。

アナクレオン一時勇壯なる事業及び名譽の念はありしならん、然るに彼れの琴は之を好まず、アナクレオンの心情の糸は、只愛と美とに響くなり。又曰く、
「彼の名譽の念に迷へる者は、宜しく戦場に出で、之を獲べし、我不名譽の心は酒杯以外に求むる所あらざるなり」

と。戦争の如き、名譽の如き、此くの如く彼れそれ好まず。其陰鬱なること及び野蠻なることは一層其好まざる

所なり、曰く、

「宗教家の喜ぶ所の野蠻なる儀式を爲すこと勿れ、又歴史の語るに於て戦慄する悲劇を語ること勿れ」

と。此くてアナクレオン宴會の主人となり、美、愛及び酒を樂しみ、バックス、エヌス、キュビッド及びニンフ等の諸神を招待す。ブルカンの神はアナクレオンの宴席には來らざるなり。其中エヌス及びバックスは最もアナクレオンの敬愛したる所となす。而して歌ひて曰く、

「今宵烈しく我れ歌はん。我れ快樂に狂すべし。古は狂して人を殺せし者ありき、されども我は人を殺さず、只葡萄の血液を流すのみなり。古はユピテルの子、手を鮮血に染めて、恐ろしき大楯を持ちて戦ふ。

我手は楯も矢筒も之を持ち得ず、只黄金こがね作りの酒杯を擧ぐるを得るのみ、而して我凱旋の紀念とは、只散亂したる花環あるのみ」

アナクレオン又た一事大に排斥する所のものあり、金銭の念これなり。而て之を貴ばざるのみに非ず却て心情に害ありとなして曰く、

「黄金は只これ婦人の夢みる所。神よ此下等なる鑛物を好むの罪を許すこと勿れ。一旦黄金を好むの情起る時は、人は、人の爲めに感ずることを忘れ、社會的の情は死し、温和なる思想亦遁れ去るべし。又戰爭は黄金を好むより起るものなり。而して黄金の最も有害罪惡なる力は、愛者の心情を破ること之れな

り』
ど。多の詩人大抵金錢を卑しむ。金錢素より無かる可からざる者なりと雖、又時に人心を害し愛情を傷るものなり。朋友間に金錢の關係は友誼を破り、愛人間には全然金錢の關係を許さざるなり。若し詩人の夢みる如き、金錢なくして成立するの社會あらば、世は如何に情愛濃ゆきものならん。嗚呼、今や愛情は金錢に由て賣買せらるゝ物品となり了れり、淺ましと云ふも亦た愚なり。自然が美しく造りし女子、其可憐なる情は買はれて、不風流、俗臭の横平なる紳士漢に其手を與ふ。何たる不理想ぞ。今や美の兩頬には實情より溢るゝ微笑を見るときを得ざるなり。願ふ所は可憐純白なる少女の情は、又真情に充ち、

純潔なる思想を有せる男子の有たらしめんことこれなり。』
金錢已に貴からず、然らば王國は如何ん、アナクレオン
又之を以て空なりとして曰く、

『我れ王國の如きは空なりとなす、ペルシヤ王の其富強、我其王位も羨まず、又蓄積せる金錢も我が欲する所に非ず。只我願ふ所は薔薇の花の我額を覆ひ、其香の馥郁たらんこと之れなり』

ど。人皆金錢は幸福なりと思へり、されども實は必しも然らざるなり。生活假令質素なりと雖、幸福ならばこれ實に幸福たるなり、何ぞ必しも金錢を要せんや。金錢必しも人を幸福ならしめず。是を以て帝王にも不幸あり、又苦痛あり。かの金錢のみ一切の能力を有せりと思ふが

如きは眞に愚なり。若し世上の金満家にして金錢萬能主義を信ずる者あらんには、彼れ實に愚昧にして、救ふ可からざるの迷信家なりと謂ふ可きなり。

『手鍋携げても奥山住い、賤が伏せ屋も月がさす。』幸福何ぞ金殿玉樓に限らんや。吾人の「ユートピア」よし夢ならんとも、吾人之を胸中に描かざるを得ざるなり。

既に富も希はず、王國も羨まず、又名譽も欲せざるなり。アナクレオン又學問も要することなしとして曰く、

「去れ、規則的の人よ、去れ。學問我に用なきなり。

學者は我をして學ばしめ、又我をして考へしむと雖、能く我をして飲せしめ、又能く愛せしめ得るか。願くば我精神をして漫々と湛ゆる酒杯の中に泳がしめ、

我胸をして神聖なる「ニンフ」女神を擁せしめよ。」
學問は人をして智者たらしめん、然りと雖智識は必しも人を幸福ならしめざるなり。是を以て、アナクレオンは學問に背を向け、人性の單純なる實質を擇びたり。

三

人間の快樂中、其最も大にして又た最も人類に普通なるものは實に愛情なりとす、愛情は人間の至性なり。人生に色彩あり、趣味あり、光輝あり、生命あり、活動あるは皆これ愛情あるに由るなり。愛は人生の光明なり、生命なり、若し愛なき時は世界は暗黒のみ、沙漠のみ、日月天に輝やくも光なく、花は野邊に咲き笑ひとも美なく、人事活動の大機關は忽ちにして其運轉を停止すべし。愛

の力や大なるかな。是を以てアナクレオン言語と行爲に於て、其全生を愛の賛美に献げたり。

初めアナクレオン道理の心ありき。而して道理は時に愛情に反対し、或ひは名譽をすゝめ又は偉大なる事業を説く。然るに愛は平坦安易にして樂しき道に來れど勸む。茲に於てか兩者時に衝突するなり。アナクレオン初めは道理に従ひ以て愛情を壓せんとせり、然るに愛情道理に向て戰を挑み、遂に之を擊破し、アナクレオン茲に愛に降伏せり。其時の情を語りて曰く

『我心は決定せり、戰爭は止みたり、我れ終に愛することに決したり。愛の子キュビッド微笑して我を招きて従へど命す。我れ心に謂へらく、只愛の一微笑

を以て我内心の靜平に代ゆること能はずと。即ち其優さしき招きを拒絶せり。是に於てキュビッド怒りて直に弓矢を取り、我に戰場に來れど挑む。我亦武器を手にし、勇氣を以て愛と戰はんと欲し、乃ち甲冑を着し、楯を持ち槍を携へて戰に臨む。我れ愛と戰へり、我れ愛と戰へり。愛其矢を注ぐこと急なり。我れ恐れて遁れ、而して我が負傷せざるを誇る。彼れ今や一矢だに殘すことなし。然りと雖我内心を伺へり。我心、嗚呼死せり。知らざるの間に愛の神は我心に坐を占む。我楯よ、我汝に暇を告げん、何ぞ我に不忠なるや。嗚呼無益なるかな外部を勉むることとは。我敵外にあらすして内にありき』

山中の賊を滅ぼすは易しと雖、心中の敵を破るは難し。愛の矢甚はだ鋭く道理の楯終に功を奏せず。愛は人性の至真なり、實に禦ぐ可からざるなり。アナクレオン愛情の徐々に心内に發達して遂に又如何ともすべからざるの情を云ふて曰く、

「夜も深けて大熊星は天に輝けり、人は晝に勞れて今は安く寝れり。此寂寞たるの時一小兒來りて戶外に音なひ、悲しげなる聲を以て我れに宿りを乞ふ。我れ目を覺して何者なるやを問ふ、小兒答へて曰く、別に異しきものには非ず、一人寂しき荒野を辿り、雨降り來りて我身を濡らし、霧深くして一點の燈火だに無し、願くは一夜の宿を借し玉へと。我其憐れ

なる誰を聞き。又夜風の吹けるを聽き、火を點じて戸を開きて小兒を入らしめて之を見る。嗚呼これ、愛の子なり、夜目にも其容貌は輝やけり。彼れの手足は冷却せり。我れ憐れみて小さき手を握りて之を暖ため、憂ふる勿れと告げ聞かせり。小兒漸く温まれり乃ち我に請ふて曰く、願くは我弓を試みることを許るせ。夜雨其彈力を弱めやせんと。彼れ矢を弓に番ふるかと見れば早くも矢は飛び來りて我胸に中り心の深き奥に立てり。小兒忽ち微笑して飛び去りつつ曰く、さらばよ、我弓は雨にも弱められず、我矢は尙は能く人を狂せしめ得ることを知りたり、さらば、さらば」

と。最も可愛き比喩を以て、最も人心の眞性を寫せりと
謂ふ可し。

女子は快樂の化身なり、愛情の目的物なり、美の活ける
ものなり。快樂詩人の婦女子を歌ひて最とも眞を得、美
を致すは其當然たるなり。嗚呼女子の眼、これ實に女子
の最大なる武器なり。『能く我心に打勝ちて我心をして出
血せしむるは甲冑着せる武人に非ず、又は壯大なる海軍
にも非ざるなり。女子の涼しき眼、其眼よりはキュビッ
ドの軍は發射せられ、我心は傷き倒る、眼の軍甚だ強し。』
アナクレオン又萬物競争に向ての武器を有せるを謂ひ、
女子は一層有力なる武器あるを云へり。其言に曰く、

「天は牛に角を與へ、馬には迅速なる足を與へ、獅子

には銳利なる牙を與へ、人には天の光明たる思考す
るの心を與ふ。萬物皆天に得る所あり、天豈女子に
一層善き者を與へざることあらんや。嗚呼快樂の子
たる女子よ、天は汝に美を與へ、眼の光を與へたり、
眼の矢には戦争の矢も敵するの力なく、美の火焰に
は戦争の火焰も尙ほ消え去るべし。女子よ美なれ、
我れ汝を讃めん、微笑せよ、世は汝の前には弱かる
べし。」

あゝ美、眼光、微笑—何たる武器ぞ、之れが爲めに人は
生き人は死す、之れが爲めに人は活動し人は失望す、之
れが爲めに軍起り國傾く。トロヤ十年の激戦、勇者の心
肝、兵士の生血、國家の滅亡。只これヘレンと云へる一

女子に平均す。バイロン曰く「若し女子若かくして美にして艶なる時は、主位も世界も全宇宙も彼女の爲めとし云は、何かあらん。假令天上よりは星辰を振ひ落さんとも、假令我身は自由を失ひ、心緒錯亂することあるとも又假令彼女は悪魔ならんとも、此情一旦熾ゆる時は、帝位も世界も棄て、顧みることなけん……アントニーはクレオパトラの眼に由りてアクチウムの戦争に敗北せり。然らばクレオパトラの眼の美は、オクタヴィウス・カイザルの勝利に平均せりと謂ふべきか」と。女子の力や大なるかな。歴史及び社會學者等人事生起の一動力として女子の美と云ふこと有るを忘るゝ勿れ。美は實に至大なる勢力を有す、一種の理想的の力なり。然りと雖美は單に遙

に置きて之に對して見るのみを以て満足せらるべきに非ず。必ずや我れ其美に觸れ、成らん限り密接し、成るべくば美其物と化し了らざれば止まざるなり。哲學者等茲に曖昧なる言語を以て之を「エクスタシー」(恍惚)と謂ひ、詩人は天地と全體となると云ふ。されども又或詩人は「願くは輕羅となりて細腰に纏はん、願くは明鏡となりて嬌面を分たん」との情を起すあり。アナクレオン亦之れと同一の感ありしなり、曰く、
「若し我れ鏡ならんには、其神聖なる微笑を照らし、我心の如く只君のみを寫さんものを。若し我れ衣にてあらんには、君の四肢に纏りて潔けき肌に觸れなんものを、若し我れ帯にてあらんには、君の胸に觸

れて其呼吸を感ずべきに。羨やましきは眞珠なるかな、雪の肌に觸れつゝ輝やく。若し我れ珠にてあらんには、又其如く有らんものを。アナクレオン此他何とならんとするや。願くば草履となりて、君の足にて踏まるゝは我の樂しとなす所』

と。チオニシウスと云へる詩人も亦同一の思想を歌ひて曰く『我れ若し軟風となりて君の上衣にそよぐ時は、君其胸を開きて容れ玉へ。我れ願くば百合の葉となりて温かなる君の胸に凋まん。我れ願くは薔薇の花の蕾とならん、然らば摘まれて君の雪なす胸に置かれて其處にて花咲くべし』と。シユクスピアのロメオも亦戀しき人の手袋となり。其美しき頬を接吻せんことを願ふと云へり。ア

ナクレオン又『笛となりて美少年之を吹かんことを願ひ、又金瓶となりて美女之を手にせんことを望む』と云へり。これ殆ど自己を畫中のものと見るなり、何ぞ可愛き思想なる。日本の無名の詩人も亦同一の感ありけん『竹になりたや、しちく竹、本は尺八、中は笛、末はそもじの筆のちく、思ひまゐらせそろかしく』と歌へり。我自由美は人生の大君主なり、人盡く其奴隸となれり。我自由を奪はれ鐵鎖を以て手足を縛せらるゝの奴隸、我等之れを苦しむと雖、美の奴隸は人之を苦痛となさざるのみに非ず、却て之を喜べり。人皆男子は女子の上位なりと謂へり、果して然るか、然り男子は女子を其下位に置き甚しきは其玩弄物の如くに思へりと雖、其男子は美を得ん

として働らき、美を我物となさんとして勉め、美を養はんとして勞苦するが如きに由りて見る時は、女子強ちに男子の下位に非ずして、實は隱然として男子の追求する理想の位置に立ち、其美と情とを以て男子を使役するが如きなり。若し人は理想の奴隸なりと云ふことを肯せば、男子は女子の奴隸なりとも謂ふこと能はざるなきにしもあらざるなり。實に人は美の奴隸なり、されどもこれ心よき奴隸にして、其束縛と命令とは好みて之を受くるなり。アナクレオン巧みに且美しく此情を歌ひて曰く

「一日「ミューズ」の諸神、花の糸もて愛てふ小兒の手を縛り、之を天の美に與へ、以て其奴隸となせり。小兒の母多くの玩弄物もてあそびものを持ち來りて小兒を連れて歸

らんと欲し、種々に之を諭すと雖小兒は歸らんとするの心なく、其花の鎖を取らんとせず、又鎖を取り去るとも尙は歸らんとせずして母に向ひて云ひけらく、「若し之をしも束縛と云ふものならんには、誰かは自由を願ふべき」と』

愛と美との性質此くの如し、我を束縛すると雖我れ却て之を希ひ、其れ等より自由なるを願はざるなり。アナクレオンの比喻美にして眞に愛すべきかな。

美は此く吾人に希望を起さしむ、若し其希望にして達せられたらば可なりと雖、若し未だ十分其希望に達せずして之を望むの位置に在る時は、これ一種の不安と苦痛たるなり。愛亦然り。戀は楽しきものなり、然りと雖戀

人は戀の中に苦痛あるを云ふ、アナクレオン又比喩を以て曰く、

『我れ愛の近づく迄は幸福に花咲きしに、一度ひ愛來りてか弱き我枝に觸れしより、我れ其傷を受けて、それより心の平安なるは一日だに無く、冬の河瀬に柳の枝の彼方此方に振り動くが如くなれり』

ど。日本歌人の

『露ならぬ心を花に置きそめて

風吹く毎に物思ひつゝ、』

ど。云へるも正に同一の情なるが如し。アナクレオン又キユピッドの比喩を以て曰く、

『一日愛の子キユピッド不注意に草上に横はれり、時

に蜂ありてキユピッドを刺す、キユピッド痛さに堪えずして大聲を揚げて泣けり。母エヌス行きて之を見るやキユピッド云ふ「小き怒れる物、羽根ある小蛇我を刺せり。我れ痛さに堪えずして死なん計りなり」と。母曰く「汝蜂に刺されて痛み此くも甚しとせば、汝の矢に由りて射られたる人の心の痛みは幾何なるやを思へ」と』

戀は苦しきものなるらん。

『然り、戀は苦しきものなりと雖、戀なきは又一層の苦しきことなり、然りと雖其最も痛切なるは我れ人を愛すと雖人我を愛せざる事となす』

片戀これ苦痛の極。人は己の理想を得ざるほど苦しきこと

は無かるべし。理想は人の眞正の生命なればなり。我れ人を愛して人我を愛せず、之れが爲めに男女絶望して病を發し、死する者あるは果して幾何ぞ。嗚呼戀、如何なれば此く楽しく又此く苦しきものなるや。戀せんか戀せざらんか、若しアナクレオンの言へる如く、戀なきは苦痛ならば我れ戀して苦しまん。古の人アチスは戀の爲めに山野を徘徊し、深林に別け入り、風に向ひて戀人の名を呼びたり。ア、戀は人を狂ならしむ。失愛は人を苦しましむるものあらざるべし。女詩人サツポーはフフォンを愛して其の戀遂に意の如くならず、絶望の苦を脱せんとして水に投じて死せり。アナクレオン、サツポーを思ひ出し、戀に苦しくば又たサツポーに倣はんかと云へり。

乃ち心中レウカチアの斷岸及び海面を想ひて曰く、

「我れ戀の心の靜平を破るを知る、されども其苦は我れ之を苦となさず。我れ我胸の狂せるを知る、然りと雖彼處に狂動あるを見ざるなり。レウカチアの斷岸より、我れ白浪打てる海中に身を投じ波に任せて浮ぶべし、戀我を酔はしめ又狂せしめたればなり」
と。アナクレオン實に數々戀に狂したるが如し歌ひて「少女よ、汝の戀に我れ狂せり」と云へり。
戀は苦しと雖も亦これ人生の大動力なり、能く人をして興起せしむ。若し愛なしとせば、世は實に趣味なく、生を保つは最も重き事業たるべし。人若し沈鬱せる時は、戀は之に力を與へて天にまで昇らしめん。心情疲れて伏

す時は、愛其光を以て我を醒ます。心鈍にして暗き時は
愛其光を以て照らすなり。我等夜も晝も愛すべし、我等
終生愛すべし——、これアナクレオンの心情なり。
詩人元來多情なり。一切の女子は盡く之れを愛す。橄欖
の蔭に遊べるアテーナイの處女、コリントスの森に逍遙
せる少女、嗚呼其美はアナクレオンの心の鎖なりしなり。
レスボス、イオーニア、クレタ、ロードス等の女子、各々
其の特質あり、或は白きあり紅きあり、或は日光にやけ
しもあり、而してアナクレオンは何れも皆之を愛せり。
情多きなり、敢て薄きに非ざるなり。彼れ實に愛を一女
子に限らずして一切の女子を愛す。處女も寡婦も少女も
妻も何れも皆之を愛せり。ナイアド、チレイド、泉水の

女神森林の女神皆之を愛す。美なるあり、黒きあり、大
なるあり小なるあり、一切之を愛す。宛も園中の花、紅
白青黄盡く之を愛するが如し。而してアナクレオンの女
子の情を得るの巧なる、處女も女神もアナクレオンの愛
を否み能はざりしなり。自ち少女を懐くるの巧みなるを
誇り、宛も驛馬を御するが如く、假令初めは荒るゝども
假令初めは否むども、遂には不知不識の中に嚮嵌められ
手綱着けらるゝを見んと云へり。然り少女等實にアナク
レオンを愛す、嘗て夢に鬼ゴッコして少女群に捕へられ
接吻せられ愛せられたるを云へり。
アナクレオン此く多の女子を愛せりと雖、其の内自ら最
も彼の心を溶かし、思を込めし女ありしなり。アナクレ

オン又可愛き鳩を飼養す、鳩忠實に彼に事ふ。其アナクレオンの最も愛せる女子の文使は實に此鳩たりしなり。此鳩或時戀歌を彼女に持ち行くの途にて人に逢ふ、其人鳩と問答す

『可愛き鳩よ、汝何の爲めに翼を動かし、空よりは香はしき花の香を降らすや。汝何處より何處に行かんとするや願くは余に告げよ。鳩の曰く汝は奇妙の人なるかな、我はテオスの詩人の内の者なり、今其命に由りて美はしき「ニンフ」の許に使用するなり、其「ニンフ」眼は青天の如く澄み、見る人をして盡く恍惚たらしめ又狂せしむ。特に我詩人は最も心を奪はれし者なり。我今空を飛びて詩人の愛する彼女の許

に戀愛の文を運べり。我羽翼は暴風強雨に對し、山谷に飛遊して食を求め巢を得ること能はざれば、アナクレオンの手より甘き食を得、彼と共に杯より酒を飲むなり。酒飲まば我れ琴の音に合はせて羽を廣げて舞ひ、樂人は歌を歌ふ宴終れば我れ琴にとまりて寝り、又も樂しき曲を夢む。我が汝に言ふべきことは是れのみなり。妄りに、時を費やしたり、いざ往かん、さらばよ』

ど。其慎眞に愛すべし、これこそは眞にアナクレオンのなり、誰かアナクレオンの快樂を咎むるものぞ。而して今此鳩の使したる女は、恐くはアナクレオンの心の妻なりしならん。妻の名はユーリブレなるべし。其微笑は彼

れの心を溶かし、其美は庭園の花も自ら耻ぢらひたり。昔は鳩は戀の文使なりしが、今や戦争の傳書に使用せらる。戀と戦争何の關はる所ぞ。昔を今に爲すを得ば世は如何に理想的のものならんか。人間の理想は常に此に指し向へり。

四

アナクレオンは飲む爲めに生れたりと云へば、彼れの快樂には酒なかる可からざるなり。酒神バックスには彼れ其敬禮を盡したり。彼れ酒を讚美して

『天上の美味』『神聖の酒杯』

と云へり。又一種哲學者様の言を爲し、人は自然法に従ひて行爲すべしとなす。多くの哲學者は、自然法に倣ふ

の説は「ストア」學派の哲學者の唱出せし如く云ふと雖、アナクレオン彼等に先立ちて既に之を唱へたり。哲學史聊か訂正する所あらざる可からず。然らばアナクレオンの以て自然法となす所のものは如何なるものぞ。他なし「飲むこと」之れなり。アナクレオン「飲むこと」の自然法なるを證明するに一種歸納法に似たる方法を以てして曰く、

「萬物の母たる地。其乾くに當てや天の落滴^{シタリ}を飲み、
渴ける草木に恵みの雨露を與ふ。夕景に立つ水氣は
これ大海の飲料なり。太陽紅を東天に染めて昇る時
は大海の雲霧深き涙を飲み、月も亦天の光輝の青白
き流れを飲むなり。さらば人々眞面目の心を以て思

考せよ、自然の神聖なる法則は實に飲むことたるなり。我れ自然法を我規則となさん、我れ宇宙を酒に於て祝賀せん』

と。アナクレオンに向ては、飲むことは神聖なる自然法にして、自然法に従ふは當に人間の爲すべきことたるなり。

酒なるかな、酒なるかな、酒は吾人の想像を浮遊せしめ、又神氣を大にす。

『我れ飲む時は實に感ず、實に感ず、詩歌の想ひ胸中に湧き出で新鮮なる酒杯の露に浴して心中天の歌神を呼び起すを感ず』

酒なるかな酒なるかな、李白一斗詩百篇、酒は實に天馬

なり、吾人の思想を飛ばして天翔けらしむるなり。酒は又人をして王侯よりも大ならしむ。

『王國は何物ぞ、我は最も富み且幸福にして又人間第一等の者なり、我れ杯に構はずして歌はん。想像我をして王よりも大ならしむ。リヂア王クロイッスの富、我之を求めざるなり。我れ天鷲絨の臥床に横はり、蔦の蔓我額に纏はり、我心の歡喜せる時、嗚呼王國は何ぞや、王冠は何ぞや。若し是等の物にして我足下に在らんには、我之を蹴散らさんのみ。強力の者は戦場に突進せよ、花咲く葡萄よ、我只汝の血液を流すのみなり。かの溢るゝ杯を見よ、只これのみは能く我に打勝つことを得ん。我れ思へり、戰場

に斃るゝよりも、酒宴に於て斃るゝは心地好しと』
酒は我をして王侯よりも大ならしむ、人若此情態にあら
んには、如何に樂しきことならん、一生醒めであらんに
は、人は盡く王侯たるべし。人若し勞苦なくして衣食し、
以て酒宴に其身を溺らし、而も後に來らん惡なきならば、
酒は實に神にして昏醉は極樂なるべし。
アナクレオン此く酒を好めりと雖、其の宴席は亂暴狼藉
を許さずして、風雅和樂を旨となし、人々相和し相睦し、
秩あり序あり以て歡しむ。乃ち其精神を歌ひて曰く、

『我宴席は光榮あれ、歡樂酒より輝き出づ。四筵の若
き樂師は、我れの琴に合はせて歌へ。紅き酒杯のめ
ぐる時は、樂の心も調子も合はせよ、……我れ大に調

子外れの事を嫌ふ共に深切なる心を合はせ、平和に
整和に歡樂せよ、……此く只平和に、此く又幸福にあ
らまほし。此くの如きの生活はいや遠永く息むこと
無けん』

知るべし、アナクレオンは亂暴なる飲酒家に非ずして『親
切なる心を合はせて平和に整和に歡樂すべし』となす。
且曰く、

『我れ飲む時は我心清く、杯傾く時は我心高くなるな
り。而して其高くなるや、樂しき流れに於てす、其
味たるや、世の交はりの道を知る人のみ之を知らん
若き人々相集まりて胸襟を開きて互に語り、心と心
とを一にす。此くして我飲むや、其樂みは我物なり。

一滴の酒中尙ほ快樂あり、酒の樂みのみは眞に我物なりと雖、其他は我物と云ふに足らず」

と。此くの如きは君子の宴樂なり、「朋友圓坐して酒杯を廻らし、精神を入れ交ふ」。朋友來りて共に樂しむ、宴席實に光輝あり、何物の樂しみか之れに如かん。支那の詩經の鹿鳴篇に似たりと謂ふ可し。グレシア人の理想とせる幸福は健康なり。美なり無害の富なり、愛する者と交はることなり、アナクレオンの精神亦大抵此くの如きなり。而して其歡樂の極に於ては、

「キュビットは天を見棄て、此處に降り、女神エヌスも酒神バックスも亦來りて薇薔の如き微笑を注ぎ」
茲に萬物アナクレオンと共に快樂を讚美せりと謂ふ。神

も來ると謂ふの宴會、其樂しみ思ふ可きなり。キュビットエヌス、バックスこれ快樂の三大神なり、其中エヌスは愛と美との女神にして快樂諸神中の主要なる神たるなり。アナクレオン此女神の海より上るの狀を形容し、其優美を謂ひ其威嚴を叙す、文詞玉藻其美を極む、吾人秃筆の能く寫す所に非ず。後此詩に據りて畫工アペレス、エヌスを畫く、其「モデル」たりし者はアレキサンドロスより與へられたる美人カンバスベにして、此女の顔と胸とは、エヌス女神を現じ出だしたり。

五

快樂は相關的のものなり、單調なる可かちず、變化なる可からず。アナクレオンの快樂は一年三百六十五日の

間晝夜を分かず飲み續くることには非ざるなり。或は春の野邊に遊び、或は夏の木蔭を楽しみ、或は花の美を稱す、亦これアナクレオンの快樂たりしなり。乃ち春の野邊を歌ひて曰く

「春の朝、玉露草上に團々たるの時、緑の芝生を歩み軟風さゝめくを聴き、牧場にそよぐを見る、樂しきかな。葡萄は熟して酒となすべき時とはなれり」
と。初春の野邊の遊び、何物の樂しみか之に若かん、又時候漸く温暖を加ふるに當りて、萬物欣々然として時を得て榮に向ひ、生を樂しむの情を歌ひて曰く、

「早春は軟風に翼を興へ、五月日光温かなり。處女グレースの神等は、露けき春の道に花まき散らして咲

かせ、つぶやく波も今は眠りて静かなり。飛び交ふ海鳥の羽根はきらめく金波に映じ、田鶴の聲は雲井より來る。日光和煦にして雲晴れ天清し。野は耕へされ小河はめぐりて流れて日光に輝やけり。地は青葉に茂り、花は小き鈴の如く、葡萄も色着き、果物亦實りて綠葉中に紅を點す」

と。小アジア春夏の際、風物正に此くの如くなるべし。アナクレオン萬物と共に天地の生を楽しみ、軟風に吹かれ、佳香を呼吸し、以て逍遙自適したりしなるべし。彼れ此くの如きの娛樂を稱して

「神聖に樂しきことならずや」
と、謂へり。然り、誰か此種の快樂を答ひるものか有ら

ん、神聖の樂しみと謂ふべきなり。
春の野邊、日光麗かにして風物長閑なり、然りと雖夏の
樹蔭も亦最も樂しきものなり。アナクレオン樹立の中の
小亭に在り、會々小女其前を過ぐ、即ち其情を歌ひて曰
く

『可憐の少女、此處に來りて暫く休め、木の葉茂りて
屋根爲せり。いとも樂しき景色かな。木は尙ほ若く
して、吹く軟風に櫛られて振り動き、泉の聲は耳に
澄みて冷しく覺ゆ。げにこれ静けき樂みならずや。
嗚呼少女、誰かは此樂しき場所を見過ぐべき、我も
汝も見過ぎはせざらん』
と。涼しきかな夏の樹蔭、軟風そよぎ泉水滴々聲ありて

心耳を洗ふ、吾人實に仙化するの思ひあり、誰かアナク
レオンの快樂を答むる者あらん。

花はアナクレオンの愛せし所にして、薔薇の花は花中の
花として殊に之を愛したり。而して一切、美なるものは
一として薔薇にあやからぬものなしとして曰く

『自然界の美なるもの、一として薔薇の其光を注がぬ
ものなし。朝の東紅を色どるや、自然の指は薔薇の
色もて之を染むなり。キテレア女神の姿には薔薇の
花の紅は雪の肌に寫り合ふなり。此花又佳香を放ち
能く人の苦痛を和げ、終に枯れて花凋み、其色はう
つらうとも、尙ほ死に於てすら優さしき香をば送る
なり』

と。實に其花の花やかなるは花の王なり、其枯るゝや、
嗚呼美しき人の死の如きかな。薔薇は春の愛兒なり「諸
神も薔薇の生るゝ時は之を祝して喜ぶ」と云ふ。諸神天
上を歩める時、其佳香を喜び、キュピッド、美麗なるグレ
ースの女神等と共に踊り歩む時は、頭を飾るに薔薇を以
てす。「我が歌ふ時、花を降らせ」とはアナクレオンの願
ひにして、彼れ薔薇に恍惚たりしなり。

六

アナクレオン此く歌へり、又此く楽しみたり、人は樂し
む爲めに生れたりと信じ、其信するまゝに行ひたり。然
りと雖年は知らざる間に高くなるなり。紅顔永久に續か
ず壯身亦常なるものに非ず、身體次第に重く、漸く老來

れりとの感生ず。

嗚呼年齢、人力又如何ともするなし。紅顔去りて額に老
の波打ち、腰は曲りて弓となり、齒は落ちて聲漏れ、黄
金の髪は白雪とならん。實に不快の觀念なるかな。老—
老の後には何かある、曰く、死及び墓あるなり。死は萬
事の終にして、狹隘なる窖中に伏し、腐敗次第に其身に
迫り、今や歌ふことなく飲むことなく、愛することなく、
寒き泥土となり蛆となる。暗黒なるかな、不快なるかな、
又空なるかな。
老及び死、今や此念は年と共にアナクレオンの腦中に頑
固に浮び來るに至れり。此に於てアナクレオン「世路暗
黒なり」との感を起せり。然り、人若し前途に老と墓と

あることを思ひ初むる時は、萬事盡く空にして世路實に
暗黒の感なき能はざるなり。然らばアナクレオンは之れ
が爲めに心氣鬱塞し、以て所謂厭世家となりたるや。否
否アナクレオンは一種の哲人なり、決して自ら悲哀の路
を選びて歩む人に非ず、成らん限りは是等の念を追ひ拂
ひ、尙ほ快樂を續けんとす。乃ち其言に曰く「吾等無
益に悲むこと無からん、殊更に快樂の道を踏み外づして
以て悲哀の道を歩む可けんや」と。而して其是等の不快
なる、老、死の念を拂ひ去るの方法たるや、一は物の道
理の必然を悟ることを以てし、一は酒を以て是等の念を
驅除忘却するにあるなり。アナクレオン漸く老たり、從
來の經歷を回顧して曰く、

「我れ知る、天我れに人生の路を歩むを命じたるを、
而して我が經過して觀たる所の景物は、今や再び返
へらす可からず、嗚呼實に再び返へらす可からず」
と。從來の經歷は若きこと、望みあること及び現在の快
樂なりき、而して若きことは再び返へらす、希望も年と
共に次第に去るなり。之を如何にすべき。而して

「我が將さに往かんとする所は其如何なるや我未だ之
を知らず、又知ることを願はざるなり。之を以て「心
配」よ、汝は我が如き心意には汝の鐵鎖を投じて之
を束縛すること能はざるべし。否々我が如く感ずる
者は、決して汝の奴隸たることあらざるべし。死の
我に來らんまでも、我尙ほ歡喜の豊艶なる花を集め、

我〇洞〇み〇行〇く〇生〇命〇を〇輝〇か〇さん〇。パ〇ッ〇ク〇ス〇我〇冬〇を〇花〇さ〇か
せ、エ〇ヌ〇ス〇我〇墓〇に〇ま〇で〇舞〇踏〇し〇來〇らん〇」

パックス我冬を花さかせ、エヌス我墓にまで舞踏し來らんと。アナクレオン何ぞ其主義に忠實なるや。彼れ常に快樂のみを見て、死の如きは之を見ることなからんとし、殆ど心に介せざるなり。何となれば吾人假令死を思ひ之を恐るゝとも、死は終に通る可からざるものなればなり。而して彼れ又死の念に對して金錢毫も益なしとして曰く『吾れ若し黄金を蓄積せば、一寸なりとも生命を延べ得るか。若し黄金にして一時なりとも、死の手より呼吸を買ひ得るならんには、我れ實に此貴重なる鑛物を積み上げ、一朝運命其使者を送りて我をして虚

影たらしめんとする時は、我れ此鑛物を以て生命の或時日を購得し、又其使者に賄賂して、彼をして再び地獄に歸らしめん。然るに金錢此能力を有せざるなり。我れ焉ぞ妄りに死を恐れん、生命の日の不定何ぞ悲しまん。金光毫も墓の中夜を照らすことなし。我れ何ぞ金錢を求めん、只我れ求むる所は酒席なり、宴會なり、朋友會合して樂しむことなり』
と。美なり、酒なり、宴樂なり、朋友なり、是等は能く死の念をして消散せしむ、

「今や涙は何處にかある、嘆息何處にかある、風に吹かれて飛び去るなり、風に吹かれて飛び去るなり、只誰か我れ往く道を知る者ぞ、否々世路は暗きなり、只

酒のみは能く之を照らさん。然らば我れ泡立つ酒を
飲み、以て人生の道を遊り往かん』

ど。而して又思考的・道理的の説を以て、人々が死を思ひ、
之を恐るゝの愚なるを曉して曰く

「此酒杯中、一切我れの心憂を沈め眠らす、如何なれ
ば恐れを洩らし、又は無益の涙を流すや。「死」
は我嘆息を心に介せず、又我涙に由りて其情を柔め
ざるなり。樂しき笑顔の人も、悲しく歎ける人も、
等しく死なざる可からざるなり。吾等無益に悲しま
ざらん。殊更に快樂の道を踏み外づし、好みて悲哀
の道を行くべけんや」
と。然り、悲しむも死す笑ふも死す、吾等雙眼に涙を湛

ゆるとも死は其情を柔め、泣く人のみは死せざらしむる
ことなし。假令我れ死を拒むとも、死は遠慮なく我等を
見舞ふなり。死する時は死せざる可からず、然るに尙ほ
死を悲しむは愚に非ざるか。悲しみつゝ死せんよりも、
歡しみて死せんこそ、然り死するまでも樂しまんこそ、
却て賢き行なれ。

人は未だ來らざる死に對し、妄りに種々の妄想を描きて
自ら悲しむ。これ豈自ら作れる妄想に苦めらるゝ者に非
ざるか。グレシアの快樂哲學者エピクローロス曰く

「吾等決して死に會ふことなし、何となれば我生ける間
は勿論死來らず、死來る時は我既に在らざるなり」
と。然るに自ら悲哀と恐れを作るとせば、これ實に愚な

りと云はざるを得ず。只樂しむことを思へ、死すべき時は死するなりとす。

此くてアナクレオン老及び死の恐を追ひ拂へり。而して快樂主義の性質として、生命の長短の如きは又重きを置きて心に懸けざるなり。何となれば其求むる所は快樂なり、生命必しも快樂に非ず、空々無味なる生命は有りとも何事ぞ。苦痛不安の生命ありとも何事ぞ只快樂ならば一瞬時と雖も實に貴としとなす。故に曰く

「我れ古代の長壽者を羨まず、年長じて足よるめき、心に恐れを懐くものとなることを願はざるなり。一小時の快樂は、無味單調の永久よりも勝れるなり」と。所謂、「短くとも太く」と云へる主義なり。此思想は

支那の楊朱も亦之を有す。英國詩人バイロン亦此主義を有し、美はしく之を言へり。其サーダナバルス篇中、サーダナバルス宴樂に餘念なし、人之を諫めて生命の危きを云ふ、サーダナバルス曰く

「喜悅、歡樂、愛情の最中、死よ突然來れ、我れ枯れ凋む薔薇たらんよりも、寧ろ摘まれて、摧くるものとならん」

と。又バイロン「ドン、ジュアン」篇中の少女の死を謂ふて曰く

「彼女此く生き此く死せり、其容貌には悲しきことも耻もなし。彼女は年月に由て生息し、冷淡なる心情となり、年老ゆるまで尙ほ地上に生きて内心の苦痛

を忍ぶやう造られざりき。彼女の生きたる年月も、
又其爲したる快樂も、假令時間は短かしくとも、實に
快樂のみにて満ちしなり』

と。人生の人生たる價值は、年月の長短に非ずして其の
實質の如何んにあるべし。若し只長生のみを求むとせば、
いや初めより無生の木石たるを可なりとなす。緑の松、
人其不變を稱すと雖、花さくことは永久に非ざるなり。
夕影待たぬ花なりとも、朝顔の花やかなるを我は擇ばん。
苦痛は、勿論、單調無味の千萬年、我に於て何かあらん、
假令一瞬時の短きとも快樂ならんことを願ふ。時間とは
何ぞや、永久とは何ぞや、實在とは何ぞや。永久とは現
一瞬間に外ならず、何となれば過去は既に去りて有るこ

となし、未來は未だ來らずして又無なり。有は只現在の
一瞬のみ。實在とは何ぞや、只此一瞬間に現はれたる觀
念なり、感情なり。これ全時間、全永遠、全實在なり。
故に若し一瞬快樂にして其瞬間に死せしならんには、吾
人は全生快樂にして、我本體、我實在は快樂たりしもの
なり。「歡樂戀愛の最中、突然死來」らば、これ吾人の大
幸福なり。長生何ぞ望まん。是に於ては「太く長く」も
「太く短き」も其實同一たるのみ、「小さく長き」はアナクレ
オンの全く似らざる所なり。
然りと雖、死は吾人の願ふ如く、突然として快樂中に來
るものに非ず、又人間の生命欲は吾人をして一と思ひに
此世界に遠を告ぐることを能はざらしむ。或は疾病あり、

貧苦あり、不名譽あり、飢渴あり、不平あり、苦痛あり、然る後に死は来るものなり。而して或は吾人を炎熱煩悶の床に臥さしめ、時に黯澹恐懼の念雲の如く叢り來り、平常に賢明にして善良なる判斷ありし人も、疾病的に宗教的迷信と恐懼とを生せしめ、以ていくじなくも神に祈らしむることあり、而して後に死は來る。安々として死する者は蓋し少し。若し死は歡樂の最中に當り、突然來るものに非すとせば、我れ我力を以て我思ふ時に短刀一閃の下に斃るを得べしとせば、これ歡樂戀愛の最中に突然死の來ると同一たるなり。「ストア」哲學派は、少しく其精神を異にすと雖、其教理に於て自殺を許るし、人若し此世に生活するを惡なりと感せば自殺するとも可なり、

然りと雖窮迫悲哀にして死す可からず、大膽に見事に死せざる可からずとなす。此學派中自殺せし人甚だ多し。而して此點に於ては「ストア」主義と、今我言ひし所の快樂主義とは、互に手を取りて進むものと謂ふべし、實にバイロンの海賊篇のコンラッドは、快樂主義の「ストア」學派の人と云ふべし、彼れ海賊の勇壯なる死の狀を言ふて曰く

「死何ぞ恐るゝに足らん、……生命の生命は我手中にあり、……かの老廢に戀々として匍匐せる輩は、其の病褥に平臥して重き呼吸を爲し苦しき頭を擡ぐ、然るに我等の臥床は新鮮なる浪花飛玉にして熱症の床に非ず。彼等（平常の人）の死するや瞬間毎に暗黒に

陥ると雖、我等は一躍して死苦を脱す』
と。されどもアナクレオンの如き心は、死に就きて餘りに重きを置きて考へず、只自然に任ずるのみ。樂しめ、樂しめ、吾人の生命は短きなり、生ある内に樂しむべし、浮世夢の如し、歡を爲すこと幾何時ぞ、死後は我れ知ることなし、花の色香も生ある内にこそ愛すべけれ。

『我れ何ぞ死後冷却せる無覺の墓上に、薔薇の花を撒くことを願はん、花吹く風も其色香も、死の冷却何ぞ之を感じんや。我又我死後、墓上に涙を注ぐことも願はざるなり。されども我今現に生ありて脈搏ち身體温かなり。今其香を吸ひ、燃え立つ色の薔薇を私の額の上に香はらせよ』

死後、色も香も我樂しむ能はず。願くは是等は現在に我に與へよ、現在飲まん、現在愛せん、現在花を弄ばん。

『今日我れ急ぎて杯を傾けん、宛も明日のあらざるが如く。明日とならば、何かあらん、我又再び飲まんのみ』

今日は今日なり、明日は又明日の今日とせよ、此くて永久に今日を續けて明日無きが如くせよとす。而して今日

は 『終日、日の照る間、時たちて花の如き光を暗く爲さざる内は我等樂しまん』

と。實にこれアナクレオンの「時」に對する觀念にして、此念に基きて其快樂の主義を立てたり、然り、昨日も今

日なり、今日も今日なり、明日も今日なり——永久の今日、今日一日は楽しまんとす。

七
日○も○遂○に○は○暮○る○い○なり、花○も○開○け○ば○散○り○ぬ○べ○し、老○の○念○は○酒○も○て○驅○除○し、前○途○の○闇○は○杯○も○て○之○を○照○す○も、知○ら○ざ○る○内○に○年○は○積○り○て○老○ゆ○る○な○り。初○め○は○只○老○の○念○を○不○快○と○感○じ○て○他○人○の○事○と○思○ひ○居○た○る○が、今○や○ア○ナ○ク○レ○オ○ン○も○自○ら○老○て○老○人○と○な○れ○り、而○し○て○茲○に○自○ら○老○ひ○た○り○と○の○意○識○生○じ

『年は額の紅を去り初めたり』

と感じ来る。あゝ紅顔のアナクレオン、額は色を失ひ、髪は白くなり初めたり。心細しと謂ふ可し。然りと雖彼

れ尙ほ之を意となさずして曰く

『我只快樂を爲すの外に他の時なし』

と。此くて其快樂を續けたり。然るにアナクレオンの愛せる女アナクレオンに云ふて曰く『見よ汝の花の色はうつりにけり、鏡に對ひて之を嘆け、汝の身は世に古り來り、髪は薄く、髪は白く枯れ凋めり』と、されどもアナクレオン答へて曰く

『我れ髪薄くなりしや否や之を知らず、又意に介せず、

只我れ墓の方に近づきたるを知るのみ。されども死の近づき來るに従ひ、快樂益々快にして又益々貴きを感せり。我若し一時なりとも生命あらんには、其小時をも快樂の爲めに費やすべし』

と。生命短くなるに従ひ、快樂益々貴きは眞理なり。吾人は前半生の快樂を後半生の犠牲に供するに非らずや。死の瞬間快樂ならば、彼れ最後の現在は快樂の實體にして、全生快樂なりしと同一たるなり。

アナクレオン紅顔去りて青年の花は枯れたり。之を以て『紅顔を酒に借り』

以て青年に交はりて舞踏の列に入り、再び若き氣にて戯れ樂しみ、齡の裡より微笑を漏らし、其『心情は尙ほ若し』となし、『假令額には老の波打ち、其紅は去れりども、額に非ずして心を讀め、必ず愛の老ひざるを見ん、其愛は小兒なり。日々生る。人必ず云はん、愛生れて幾歳ぞ』これアナクレオンの老ひし時の情たるなり。

形こそ深山隠れの朽木なれ

心は花に爲さばなりなん
されども小女は心を見ずして額を見る。アナクレオン假令心の若きを辨解すども、花も凋めば誰かは之を愛すべき。少女も今はアナクレオンの思ふ如くはならずなれり。されども彼れ尙ほ少女を愛し、之を誘ひ之を招く、少女容易に來らず、遁れ去れり。アナクレオン曰く

「遁るゝ勿れ、我髪は雪の如しと雖遁るゝ勿れ。假令我れ年寄りて衰へ、又輝ける紅も去れりども、我尙ほ汝を慕ふなり。汝來らば我は如何に幸ぞや。我汝に花束を作れり。嗚呼紅顔に笑む少女、燃え立つ色の薔薇の花に、雪なす白き百合花を交へ、美はいや

益して美なるなり、我ど汝どの如きかな』
と。されども少女は來らざるなり。アナクレオン心悲し
む。思へば猜たし、彼の女笑ひ去れり。『彼女の嬌媚は他
の若き者の幸福なる腕にたくはへられん』
うら若み寢よげに見ゆる若草を

人の結ばんことをしぞ思ふ

とは、實にアナクレオンの心情なり。以前はキュビッド
招かずして來りしに、今其額の白雪を見て

『忽ち小鷲の如く飛び去りて、實に「さらばよ、汝は
終りに近きたり、さらばよ」と云ふが如きの心地せ
り』

と云ふに至る。

嗚呼紅顔の色衰へ、髪は白雪となり、キュビッドは去り、
少女は來らず、招かずして來るものは老の重き感と死の
念なるのみ。以前は悟りを以て人は死せざる可からざる
こと、曉らめ、或は酒、或は歌もて其暗黒なる念を拂ひ
去りしも、今や一步一步に前途暗く、死の念も漸く恐ろ
しきものと感せられ來り、

『死の念はすごきかな、死神の家は暗く、其路は悲し
く、其陰暗凄愴たる旅行の終りし時は、我等再び歸
り能はざらん』

と云へり。
實にアナクレオンの生命の日も黄昏に近づきたり。花の
色香も凋みたり。然りと雖アナクレオン未だ失望して陰

鬱なる思想を起さずして、尙ほ墓に入るまで飲み、歡喜の豊艶なる花を集めて其洞み行く生命を輝やかさんとし、酒もて若き時の記憶を呼び起こし、若き人々の樂しみ遊ぶを見る。

アナクレオン生命のあらん限り此く快樂を續けたり、死するの時も亦此く、薔薇の花の枯るゝ時にも薫はしき如くあらんことを希へり。アナクレオン一日葡萄を食す、これ其最も好みたる所のものなりしが、核子咽喉に塞まりて死せり、其死するや静かなること寢るが如くなりしと謂ふ。能く其主義に相應し、又以てアナクレオンの本意を得たる如きの死なりと謂ふ可し。

アナクレオン此く生き此く死せり。神聖なる詩人と稱せらる。其墓は常に緑の蔦縈ひ、夏には葡萄は蔓を延ばせ薔薇は咲きて榮ゆなり。泉水其側に湧き出で、小き流れを爲し、又其若き時の望みの源なりし妻なる人の墓もあり。アナクレオンの像は彫みて建てられたり、其下に銘して曰く

「旅の人よ、此像近く來ることあらんには、暫く眼を之に注ぎ、家に歸らば「我れテオスの聖人、ミューズの書を飾りたる、最も優りし詩人の像を見たり」と云へ」

アナクレオンはテオスの聖人と呼ばれたり。最も溫和にして樂しき性質を有し、又よく人々に愛せられたるを知

るべし。實に青年も婦女子も近隣の人も皆彼を愛し又敬したるなり。アナクレオンの宴席必ず「朋友」を招き、整和にして秩序ある歡樂を盡くし、杯を取り交はし、或は之を廻らして互に精神を通じ、以て情を一にせり。或人アナクレオンを讚美して曰く「テオスはグレシアに寶物を與へたり、聖人アナクレオン、愛に於ける聖人、己を好める少女の爲めに快樂の歌を織れり。毎夜の宴席に於て、客人誰か其坐を遁れ歸る者あらん。愛の願ひに於ては、如何なる「ニンフ」も彼を否むことを得爲さぬなり」と。最も人々に敬愛せられたるを知る、嗚呼テオスの聖人。

此くアナクレオン墓中に休めり。されども其精神は死せ

ざるなり、後の詩人ジュリアン墓銘をして言はしめて曰く
「此課業は我生存中より歌ひ居たるが、我れ尙ほ墓中より之を歌はん。人よ飲め、時尙ほ若かくして、死汝を我如く寒冷ならしめざるの前に飲め。」

九

飲むことなり、愛することなり、美を頌することなり、これアナクレオンの一生爲したる所なり。此快樂何の悪しきとある。快樂主義、之を人生の目的として何の悪しきとある。吾人は飲、食、色を以て快樂の全體なりと云ふものに非ず、又人に由りて快樂の異なることも亦之を知る、然りと雖其種類の何たるに論なく、快樂其物は決して決して、惡に非ざるなり。吾人は今此處に道德

學を論せんとするに非ず、道徳は人間社會を成形するの必要條件なり（道徳は快樂を求むるの方便なりと云はず、避く可からざる條件なりとなす）快樂を求むるの人性より派生附従し來る條件にして決して人性の目的には非ざるなり。快樂は心理上、我が純粹なる善なり、道徳は一箇人たる我に非ずして社會の善（平和幸福等）を目的となす。古來聖賢快樂を惡となすなし。孟子の如きも梁の惠王の樂を好むを咎めず、人と與に之を樂めば一層樂しとなし、齊の宣王の勇を好むを咎めず、一層其勇を大にせよとなし、貨を好むを咎めず、以て善に使用すべしと云ひ、女色を好むも亦敢て咎めず、只之を推して人にも其快樂を得せしむべしと云へり。快樂其物決して惡に非

ず、今吾人の一身のみに付いて云ふ時は只其結果等を考へて快樂を選び、又其節度を守れば可なり、又若し社會の點（道徳）より云ふ時は、我と他との快樂の衝突を避くれば可なり。

人は實に快樂を得、苦痛を避けんが爲めに行爲せり或種の學者は、快にも非ず苦にも非ざる者の爲めに人行爲するありと云ふ者ありと雖、吾人の見る所を以てすれば、世上恐くは此くの如きの人は實在せざるべしと信ず、若し眞にこれありとせば彼れ世上の至愚なるか、狂者なるのみ。政治の大目的となす所は最大數の最大幸福にあり、法律も然り、道徳も然り、汽車の疾走するも汽船の波濤を蹴破るも、電信も諸機械も、皆なこれ快樂を求る情よ

り○發○生○す○る○現○象○た○る○な○り○。戰○争○も○亦○快○樂○の○衝○突○よ○り○起○る○
も○の○に○外○な○ら○ず○。ア○レ○キ○サ○ン○ド○ル○の○大○遠○征○、其○終○局○は○何○
な○り○し○ぞ、バ○ビ○ロ○ン○城○内○晝○夜○不○斷○の○大○酒○宴○に○て○は○非○ざ○り○
し○か○。

世上一種の非快樂論者ありて、心理學上の説明を以て、
直に倫理學を律して快樂説は倫理學上完全ならずとなし、
又た倫理學の點より心理學を律して、快樂は人生の目的
に非ず、或は善にも非ずと云ふ者あり。これ心理學と倫
理學との範圍の異なるを知らず、前者は箇人的のものにし
て、後者は社會的現象なるに氣付かざるものなり。吾人
は快樂説と利己主義とは同一に非ずとなす、然るに非快
樂主義の論者は之を利己主義と混同し、併せて快樂をも

排斥す、これ實に混同なり、誤解なり。吾人は道德を以
て自己の快樂を得るの方便なりと説くことを以て惟一の
快樂主義と爲さるなり。最大數の最大幸福を以て目的
となす所の快樂説は高尚なる者に非ざるか。利己主義と
快樂主義とを混同するは非快樂論者惟一至強の兵器なり
とす。孟子の梁の惠王、齊の宣王に快樂を説きたるの精
神は、實に吾人の精神なり。近頃一雜誌に此點を誤解し、
心理學の範圍と倫理學の範圍とを混同し、利己主義を快
樂説中に投入し、而して『快樂主義の心理上の根據を破
す』と云ふて併せて快樂主義の倫理説を破し得たりとせ
る論者あり。吾人の眼より見る時は快樂説、之に由て破
れたりとも見えすして、却て前述の如きの混同あるを見

るなり。

快樂は人間の求むる所なり、之に達するの方便を實利と謂ふ。實利主義亦利己主義と同一に非ずと雖、非實利論者は之を混同せり、故に其論正を得ざるなり、一身を利し、社會を利し、國家を利するはこれ至善なる事業に非ずや。「易」たれ、孔子たれ、墨子たれミルたれ皆之を主義となす。實利を以て倫理の標準となす。高尚に非ざるか。近頃「功利道德を論ず」と題して實利主義を非とせる者あり、素より淺薄にして陳腐なり、西洋人の餘唾を嘗むるものなり、而もアメリカ歸りの「ドクトル」の學說と稱す。

アナクレオンは快樂を行ひたりと雖其哲學者には非ざる

なり、又社會國家及び道德等の關係に就きての意見素より有るなし。吾人バイロンの「サーダナバルス」篇を讀むに及びては、實に快樂主義の最高の點に達し、立派なる理想的の形を取りしを見るなり。篇中或人サーダナバルスに勸むるに勇壯なる戰爭的人物となり、祖先セミラミス女王を以て模範となさんことを以てす。サーダナバルス戰爭主義を排して曰く

「セミラミスは大軍に將として四方を攻伐し、……多數の兵士を戰場に殺し、其血肉を印度の鷲の食物に供し、其屍體を原野に暴露さしむ。……多數の兵士を戰場に死せしめ、以て豺狼鷲の食となす、これ果して榮譽なるか、若し之れ眞に榮譽ならんには、我其

不榮譽を擇ふべし。」

と。而して彼れ都府を創建して紀念の銘を作りて曰く

「アナシンドラキセスの子なるサーダナバルス王、一日の中にアンキアルス及びタルソスの都府を建つ。飲めよ食へよ、而して愛せよ、其他は一顧の價値あるなし」

と。而して曰く「是等の短句は能く人事の全歴史を表はすものなり」と。人ありて此主義を攻撃し諷刺して『善良なる道德なるかな、賢明なる語なるかな、王として臣下に示めすに適切なる格言なるかな』と云へり。サーダナバルス之に答へて曰く

『若し汝をして紀念碑の銘を作らしめたらんには、必

ず此く記さん、曰く「サーダナバルスは此處にて敵の五萬を殺せり、是等は其墓なり、又凱旋標なり」と。されども此かる事は我之れを戰士に任ず、我れ只人民の苦痛を少くし、彼等をして苦しむることなく墓中に滑り込ますことを得ば幸なりとす。……我に向て戦争は名譽に非ず、勝利は光榮に非ざるなり。我れ我政治をして人民に嫌はれざらしめ、此血腥き年代記中、我治世をして太平無事の世たらしめ、此年代記の沙漠中翠滴る樂地となし、後世の人民をして其往時を回想してサーダナバルスの全盛黄金時代を謳歌はしめんと欲す。我國を樂園となし、日月の變化を新快樂の時期となし、賤の男女の樂しめる其

歡笑を愛となし。朋友の呼吸を新理となし、婦人の
紅唇を我唯一の報酬となさんと欲す』

と。快樂主義是に至りて實に理想的と云ふべきなり、豫
言者イザアの理想としたる所、ヤソの理想としたる所、
儒教の理想としたる所、實に此に外ならざるなり、只「ス
トア」學派とカント者流とは此の理想國の美を感じ、其
温光に浴すること能はざる詛はれたる人間たるなり。



附録

楊子の快樂主義

(東洋倫理學史轉載)

揚子名は朱。孔子及び墨子に後れて出づ。其學黃帝及
び老子に基づくものにして、性を全うするを以て旨と爲
す。其性を完うすと云ふの點に於ては、黃帝及び老子等
に同じと雖、其内容に至りては趣を異にせり。黃、老は
無爲退隱去欲を以て眞の道なりとすと雖、楊朱は敢て然
りとせず。欲情起らば積極的に之を満足せしめ、以て快
樂を盡くすを主義とす。故に楊朱は支那の快樂主義の率
先者たるなり。

楊朱肉情的快樂主義を唱ふると雖、其躬を處するに至

りては、實に徳行の高きものなりしが如し。然らずんば如何でか一世を感動し、其學説をして天下に充滿せしむるに至るを得んや。故に彼れ他出するや舍者迎將し、家公席を執り、妻は巾櫛を執り、舍者席を避け、煬者寵を避く。然るに一旦黃、老の道を得るに當てや、無爲無欲、爭心なく、又た威嚴なし。故に舍に反るや舍者之れと席を争ふに至れり。

楊朱三畝の園を有して芸ることを勉めず、一妻一妾を有して治むることを易めざりしなり。然るに一日梁王に見へて、天下を治むるは之を掌に運らすが如しと言ふ。梁王詰て曰く「先生一妻一妾有りて治むること能はず、三畝の園ありて芸る能はず、而も天下を治むるは之を掌に

運らすが如しとは何ぞや」と。楊子對へて曰く「君其羊を牧する者を見るか。百羊にして群す。五尺の童子に箠を荷て之に隨はしめば、東せんと欲せば東し、西せんと欲せば西す、堯に一羊を牽かしめ、舜に箠を荷て之に隨はしめば、前む能はず。且つ臣之を聞く、吞舟の魚は技流に游がず、鴻鵠は高く飛びて汗池に集まらず何となれば其極遠ければなり。黃鐘大呂は頌奏の舞に従ふ可からず。何となれば其音疎なればなり。大を治めんとするものは細を治めず、大功を爲さんとするものは小を爲さずとは之の謂なり」と。これ無爲放任を以て政を爲さんとするものにして、老子の政治の主義に等しと云ふべし。然りと雖人の性情一ならず、皆欲ありて之を得んとし、此に衝

突生ずるを如何にせん。放任主義決して天下を治む可からざるなり。

楊子弟あり、布と云ふ。兄弟甚だ睦しかりしが如し、一日布、白衣を着て外出し、雨に逢ひて緇衣を衣て歸る其狗異人として之に吠ゆ。布之を扑たんとす。楊子曰く、子、扑つことなかれ。若し狗白くして往き、黒にして歸り來らば、汝豈怪むこと勿らんやと。楊子よく弟を愛して、常に其主義を以て教育したるが如し。一日楊布問ふて曰く「此に人あり年は兄弟なり、言は兄弟なり、才は兄弟なり、貌は兄弟なり、壽夭は父子なり、貴賤は父子なり、名譽は父子なり、愛憎は父子なり。吾之に惑ふ」と。楊子曰く「古の人言あり。吾嘗みに之を識るし以て汝に告

げんとせり。以て然る所を知らずして然るは命なり。今昏々昧々紛々若々、爲す所に隨ひ、爲さざる所に隨ひ、日に去り日に來る、孰かよく其故を知らん、皆命なり。予れ命を知るものは天壽なく、理を信ずるものは是非なく、心を信ずるものは逆順なく、性を信ずるものは安危なし」と。此くの如きの問答に由りて、吾人楊子兄弟の愛情を知る。

楊子嘗て宋に旅行して宿す。逆旅の人に二人の妾あり。一人は美にして一人は惡なり。惡なるもの貴くして美なるもの賤し。楊子其故を問ふ、逆旅の小子對へて曰く、其美なるものは自ら美とす、吾れ其美なるを知らず。其惡なるものは自ら惡とす、吾れ其惡なるを知らずと。楊

子之を一箇の教訓として弟子に授けて曰く、「弟子之を記せ、行賢にして自ら賢とするなくんば、安に往くとして愛せられざらんや」と。

楊子の友に季梁と云ふ者あり。同じく道家主義の人なり。疾を得て七日大漸なり。其の子環りて之を泣き、醫を請す。季梁楊子に謂て曰く、吾子不尙此くの如く甚し、汝我が爲めに歌を以て之を曉さざるやと。楊子爲めに歌ふて曰く「天それ識らず、人胡ぞ能く覺らん。祐は天よりするに非ず、孽は人に由るに非ず。我か、汝か、それ知らざるか。醫か巫かそれ之を知るか」と。これ死生命あるを云ひ、命に安んずべきを曉せるものなり。楊子人の生死に就て。交際上爲すべき所を、古語を引用して謂て曰

く「古語に曰く「生くれば相憐れみ、死すれば相捐つ」と。此語至れり。相憐れむの道は唯情に非ず。勤は能く逸せしめ、饑は能く飽かしめ、寒は能く温からしめ、窮は能く達せしむ。相捐つるの道は相哀まざるに非ず、珠玉を含ましめず、又錦を服せしめず、犠牲を陳せず、明器を設けざるなり」と。これ墨子の利を云へる説に似たり、又節葬説に同じきものと云ふべし。

楊子の近傍牧羊するもの多かりしなるべし。之を以て梁王に説くや羊の例を以てせり。一日隣人羊を亡ふ。既に其黨を率ゐ、又楊子の豎子を請ふて之を追ふ。楊子曰く「一羊を亡ふて何を追ふ者の衆きや」と。隣人曰く「岐路多きを以てなり」と。而して岐路の中又岐路あり、遂に行く

所を知らず。楊朱此に道德多岐にして、又た一生を誤ることを想起し、戚然として容を變ずること數時、又た笑はざるもの日を竟へたり。而して大道多岐にして羊を亡ふが如く、學者多方雜學を以て方向に迷ふを戒めたりと謂ふ。楊朱の一代の思想家にして、又修身に心を用ゐしや見るべきなり。

楊子著書なし、故に楊子の學説を知らんとせば、専ら列子中に存せる所の『楊朱篇』及び其他列子其他の書中に散在せる所の楊朱に關したる記事に據るあるのみ。

學説

(一) 人生觀

楊子の倫理學は其人生觀に基づくものなり。而して其

人生觀や狭小にして、決して人間全般を觀たるものに非ざるなり。楊子人生を以て空なりとなす。其言に曰く人間長生の者なし『百年は壽の大齊なり。百年を得る者は千に一なし。設ひ一ありとするも、孩抱より以て昏老に逮ぶ、幾ど其半に居る。夜眠の呬む所、晝覺の遺る、所又幾ど其半に居る。痛疾哀苦亡失憂懼又幾ど其半に居る。十數年の中を量るに適然として自得し、介焉の慮なきも亦一時の中も亡し』と。これ楊子の見たる人間の一生なり。

現世此くの如しとせば、死後は如何ん。或は未來世界なるものありて、現世の不完全を補ひ、現世の苦を償ふ所のものあるや如何ん。楊子は靈魂不死を信ぜざるなり。

勿論未來世界なるものあるべきなし。故に曰く「万物異なるものは生なり、同じきものは死なり。生くれば賢愚貴賤あり。異なる所以なり。死すれば臭腐消滅あり、これ同じき所なり。十年も亦死し、百年も亦死す。仁聖亦、死し、凶愚亦死す。生くれば堯舜たり、死すれば腐骨たり。生くれば桀紂たり、死すれば腐骨たるや一なり。孰か其異を知らん」と。生きては長命なく、安樂なく、死すれば臭腐消滅、株塊の如きのみ。これ楊朱の人生觀なり。此くの如き人生觀よりは果して如何なる倫理主義か來る。

(二)肉體的快樂主義

人生此くの如し、然るに何の望ありて生を此世に保つことを爲すや。老子は退隱を主義とし、恬淡無味、快樂な

く、慰安なく、只だ長生を得んことを冀ひしと雖、楊子は全く之に反し、長生主義を非とし、長生不死の如きは理に於て無き所となせり。今若し長生は得らるべしと假定するも、楊子は別に喜ぶことなく、人長生を得て何にせんとするか、人間は日々其事を反覆するのみとなして曰く「五情の好悪古も猶ほ今の如きなり。四體の安危、古も猶今の如きなり。變易治亂、古も猶今の如きなり。既に之を聞き、既に之を見、既に之を更て百年猶其多きを厭ふ。况や人生の苦をや」。且つ壽を求むる時は、種々の心憂伴ひ來るとなす。故に單に生命と云ふものは、楊子の欲する所に非ざるなり。且つ楊子人生の長きを厭ふとせば、何故に鋒刃を踐み、湯火に入りて死せざるやと云

ふものあらんか、楊子然らずとして答へて曰はん『既に生
くれば廢して(無心に)之に任じ、其欲する所を究め、以て
死を待つ。將に死せんとせば、廢して之に任じ、其行く所
を究め、以て盡くるに放らん。廢せざるなし、任ぜざるな
し、何ぞ遽かに其間に遲速せんや』自然に放任すべしと。
長生望むべきに非ず。死後は消滅のみ、又何ぞ之を望
まん。只實有は現世のみ。故に現世に於て性に從ひて快
樂を盡くすのみ。然りと雖此快樂も亦容易に盡くすこと
能はざるは楊子の悲しむ所なり。故に曰く『人生とは何
ぞや。又何をか樂しみとなす。美厚の爲めのみ、聲色の
爲めのみ。而して美厚また常に厭足すべからず、聲色常
に翫ぶ可からず。即ち刑賞の禁勸する所、名法の進退す

る所となり、遑々爾として一時の虚譽を競ひ、死後の餘
榮を規り、偶々爾として耳目の觀聽を慎しみ、身意の是
非を惜しみ、徒らに當年(現在)の至樂を失ひ、自ら一時を
肆にすること能はず、重囚疊梏す、何を以て异せんや。
太古の人は生の暫にして來り死の暫にして往くことを知
る。故に心に從ふて動て自然に違はず。好む所の當身の
娛を去る所に非ず。故に名の勤むる所とならず。性に從
ふて遊び、万物に逆はず、死後の名も取る所に非ず。故
に刑の及ぶ所とならず。名譽の前後、生命の多少は量る
所に非るなり』と。故に楊子の主義とする所は、現世に在
て、一意に五官の快樂を盡くすべしとなすにあり。楊子
極端に飲酒女色の例を取りて之を説明するに公孫朝と公

孫穆との兄弟の造設談を以てして曰く「子産（道德家にして君子の稱ある人）鄭に相として鄭國治まる。時に兄弟あり、兄を公孫朝と云ひ、弟を公孫穆と云ふ。兄は酒を好み、弟は色を好み。兄の室は酒を聚むること千鐘、麴を積みて封を爲す。門を望むこと百歩にして糟漿の氣人鼻を逆ふ。其酒に荒むに方りてや、世道の安危人理の悔忝、室内の有無、九族の親疎、存亡の哀樂を知らず。水火兵刃前に交はるも知らざるなり。弟の後庭、比房數十、皆稚齒媿殖たるものを選び、以て之に盈つ。其色に耽るに方りてや、親昵を屏け、交遊を絶ち、後庭に逃れ、晝を以て夜となし、三月一出、意猶愜たず、郷に處子の娥姣なるものあらば必ず賄して之を招き、媒して之を挑む。獲

ずして後己む。子産日夜以て戚となし、間に因りて其兄弟に謁して之に告げて、生命の重く、禮義の貴きを諭して曰く「人の禽獸より貴き所以のものは智慮なり。知慮の將ふ所のものは禮義なり。禮義成る時は名位至る。若し情に觸れて動き、嗜欲に耽る時は性命危し」と。然に楊子兄弟をして答へしめ、快樂主義を論じて曰く「吾れ之を知るや久し。豈汝の言を待ちて之を識らんや。凡そ生は遇ひ難く、死は及び易し。遇ひ難きの生を以て及び易きの死を待つ、熟々念すべけんや。禮義の尊を以て人に誇り、情性を矯めて以て名を招かんと欲するは、我れ之を死に若かずとなす。爲めに一生の歡を盡くし、當年の樂を窮めんと欲す。唯腹溢れて口の飲を恣にするを得ず。力憊れ

て情を色に肆にするを得ざるを思ふ。名聲の醜、性命の危
を憂ふるに違あらず。それ善く外を治むるものは、物未
だ必しも治まらずして身交々苦しみ、善く内を治むる者
は物未だ必しも亂れずして、性交々逸すと。これ禮義の
如きは外面を纏繞するものにして、快樂は眞に内を治む
るものとなすの論なり。性命は其惜しまざる所、名譽は
其顧みざる所、道義は其關せざる所、只一意快樂を得んと
せり。此くの如き、關せず意とせざる所の者を以て彼れ
に説く、彼れ焉んぞ其樂しみを變ゆることを爲さんや。
楊子人生の價値は何處に置くべきやを考へたり。而し
て單に之を生命に置かざりしなり。生命の如きは寧ろ其
輕んぜる所。人は云ふ万事生命ありて後の事なりと、然

るに楊子は此くの如き常人の見を蔑如し、生命なくとも
快樂あらば可なりとなす。前者は生物論者の言なり、後
者は純然たる唯心論的快樂主義の言なり。生命、嗚呼こ
れ何ぞや。人生、嗚呼これ何ぞや。これ時間の積重のみ。
時間とは何ぞや。瞬間の積重のみ。嗚呼此一瞬間、これ
眞の實在なり。過去は幾億万年あらんとも、これ過ぎ去
りて有ることなく、只現在の一瞬中に抽象されたる數の
念として存するのみ。未來は無限ならんとも、未だ來ら
ざるを以てこれ亦空のみ。只有るは現在のみ。故に今若
し生命主義を以て其安危を論ぜんか、嗚呼何ぞ苦勞多き、
苦勞の長生得て之を何にせんとするや。茲に於て生命論
も左程力あるものに非ざるを感ず。又楊朱の主義は一概

に乗て去る可からざる者あるを知る。楊子長生を云はざるに非ずと雖、かの恬談無味にして死せるが如き長生は、毫も之を説かざるなり。楊子の長生は之に異り、『耳の聽かんと欲する所を恣にし、目の視んと欲する所を恣にし、鼻の向かはんと欲する所を恣にし、口の言はんと欲する所を恣にし、體の安まんと欲する所を恣にし、意の行かんと欲する所を恣にし』、此くて熙々然として快樂を肆にせば何ぞ長生を求むるを要せん。一日一月一年十年たりとも可なり。若しそれ然らずして『戚々として以て久生に至らば、百年千年万年も我所謂生命に非ず』となす。時間の觀念に就ては、ローマ古代の賢帝マルクス・オレリウスも亦同様の意見を有し、現一瞬の眞實の實在なるを言

へるとあり。クレシヤ古代の快樂詩人アナクレオンも同様の言を爲して曰く『我れ古代の長壽者を羨やまず、年老ひて足よろめき、心に恐れを懐くものとなることを願はざるなり。一小時の快樂は、無味單個の永久よりも勝れるなり』と。パイロンも亦『ドンファン』篇中年若くして死したる一少女を謂ひて曰く『彼の女此く活き此く死せり。彼女の容貌には悲しきことも耻もなし。彼女は年月に由りて生息し、冷淡なる心情となり、年老ふるに至るまでも尙ほ此世に生を保ち、内部の苦痛を忍ぶやう造られざりき。彼女の生きたる年月も、又其爲したる快樂も、其時間短しと雖、快樂のみにて満ちしなり』と。生命の長短は其關する所に非ず、假令一瞬たりとも快樂ならんには、

其全生命は快樂にて充ちしものと云ふべし。ハイロン又
た『サルダナバルス』篇中に曰く『死よ突然來れ、歡樂喜悅愛
戀の最中、突然來れ。我れ枯れ凋む薔薇たらんよりも、
寧ろ摘まれて散る花とならん』と。然りと雖死は吾人の思
ふ如く最も好時機にのみ來るものに非ず。樂あらば苦あ
り。快樂より死に至るの途上には、無數の心慮苦痛の存
するものにして、前半の快樂は後半の苦痛となるを如何
んせん。若しストア哲學者の如く、常に自殺の勇氣あら
ば可なりと雖、人間の生命欲の大なるは、如何にぞや。
人間は如何なる苦楚を嘗るとも尙ほ生きんことを欲せる
に非ずや。楊朱等の言は遂に實行せられざるべし。
楊子の説は一面の眞理ありて、人生の快樂を大目的と

せるものなるは楊子の言の如し。然りと雖其快樂を以て
單に飲食色にのみ限りたるは甚だ謬れりと爲す。楊子は、
壽、名、位及び貨の四者を以て吾人の苦痛の原因なりと
すと雖、或種の人に向てはこれ等は欲求する所の目的物
たること、楊子の酒色に於けるが如きなり。且つ人には
文學技藝美術等の精神上の欲望あることを思はざる可か
らず。

吾人は快樂主義は眞理なるを認む。人生の目的は快樂
にして、道德、法律、政治等は之を得しめんとする方便
或は條件なりとなす。只快樂を以て、楊朱の如く飲食色
に限りたるは不完全と云ふべきなり。ソクラテースの門
人アリストテレスは快樂主義の人なり。今其論に曰く「一切

の快樂其物は皆善なり。然りと雖苦痛を伴ふ所の快樂は吾人之を避けん。身體の快樂苦痛は其感の強きものなりと雖、又精神上の快樂あることを否むべからず」と。これ快樂に就て正當なる見解と云ふべし。人々の多く誤解せるエピクローロスも亦曰く「吾人の謂ふ所の快樂とは、終日酒に沈湎することに非ず、或は婦女子に戯るゝことに非ず、或は又食物に奢ることに非ずして、眞面目なる熟慮を以て、一時精神を攪亂して直に消滅する如きものを避くるにあり」と。而して快樂を完うする方法として裁智を謂ひ、節制を謂ひ、勇氣を謂ひ、又正義を謂へり。此くの如きは楊子の快樂主義とは大に趣を異にす。然りと雖、其快樂は人生の目的なりと云へるは何れも眞理なり

りとす。然りと雖、吾人は道德を以て快樂を得るの方便なりと云ふものに非ずして、道德とは社會維持の必要條件なりと云ふ者なり。

(三) 德義及び名譽を卑しむ

楊子は純粹なる快樂主義の人なり。只現在のみの快樂のみを目的となし、毫も其他を顧みず、疾病來るとも、生命危からんとも其問ふ所に非ざるなり。故に德義の如きは益々以て輕しとなす。楊子此主義を以て聖人を愚と嘲けり。暴君を賢と稱す。曰く「天下の美は之を舜、禹、周、孔に歸し、天下の惡は之を桀、紂に歸す。然るに舜は河陽に耕えし、父母の安んぜざる所、弟妹の親まざる所、戚々として以て死に至る。是れ天人の窮毒なるもの

なり。禹は水を治めて門を過ぐるとも入らず、宮室を卑
うし、戚々として以て死に至る、これ天人の憂苦者なり。
周公亦天子の政を攝して戚々として以て死に至る、此れ
天人の危懼者なり。孔子帝王の道を明かにし、時君の聘
に應じ、樹を宋に伐られ、迹を衛に削られ、商周に窮し、
陳蔡に圍まれ、季氏に受屈し、陽虎に辱られ、戚々とし
て以て死に至る。此れ天民の遑遽なり。凡る彼の四聖は
生きて一日の歡なく、死して萬世の名あり。名固より實
の取る所に非ず。之を賞すと雖知らず株塊と以て異るこ
となし。桀、累世の資を藉て南面の尊に居り、耳目の娛
を恣にし、意慮の爲す所を窮め、熙々然として以て死に
至る。此れ天民の逸蕩者なり。紂、亦然り。此れ天民の

放縱者なり。彼二凶は生きて欲に従ふの歡ありて、死し
て愚暴の名を被る。實は固より名の與る所に非ず。之を
毀ると雖知らざるなり。彼四聖は美の歸する所と雖、苦
しみ以て終に至る。彼二凶は惡の歸する所と雖、樂しみ以
て終に至る』と。名の如きは空物のみ。生命中は快樂を盡
くし、其實を得べしとなす。

且つ楊子が名を輕んずるの理由は尙ほ他にこれあり、
即ち歴史記憶等の頼む可からざることこれなり。故に曰
く『太古の事滅す。孰か之を志るさん。三皇の事存する如
く亡きが如く、五帝の事覺の如く夢の如く、三王の事或
は隠れ或は顯はれ、億に一を識らず。當身の事或は聞き
或は見、萬に一を識らず、目前の事千に一を識らず。太

古より今日に至り、年數固より勝て紀すべからず。伏羲已來三十餘萬歲、賢愚好醜成敗是非消滅せざるなし。但遲速の間のみ。一時の毀譽を矜り以て其神形を焦苦す。死後數百年中の餘名、豈枯骨を潤ほすに足らんや」と。然り、此くの如き破壊的の人生觀は、實に天下に敵なきなり。これ決死的論法なればなり。吾人道德は決して人生の目的に非ざるを知る。况や苦痛が人生の目的に非ざるは一層自明のこと、云ふべし。然りと雖又人性を察し、人間の天賦せられたる所の種々の欲情及び願望する所を知るに於ては、又社會の必要を知り、道德の必生を否むこと能はざるなり。要するに、人性の組織上、人間は楊子の如き盲進的目前主義に出づること能はざるなり。之を以

て今日の如き社會あり國家あり、道德あり、醫術あり、又名譽の念ありて、以て人生を爲せるを見る。純粹の快樂のみの生活は、人間の力に超えたるものと云ふべきなり。

(四)満足主義

楊子快樂主義を唱ふと雖、これ其起りたる既成の欲望の満足を得んとするにあるのみにして、未だ起らざる欲望は之を起し、小なる欲望は之を大にせよとは云はざるなり。之を以て彼れの如き至極の快樂主義を唱ふと雖、又た一方には少欲にして足ることを知り、質素なる快樂を爲すことも亦其主義に合せるなり。楊子は其居所に安んじ、心の靜平を得ることを以て快樂となせる人なれば

なり。之を以て求む可からざるを求め、畏る可からざる
こと。心に心を動かすは楊子の取らざる所となす。而して其
排斥する所のもの四つを數へ舉げて曰く「生民の休息を得
ざるは四事の爲めなり。一を壽と云ひ、二を名と云ひ、
三を位を云ひ、四を貨と云ふ。此四者を有するものは鬼
を畏れ、人を畏れ、威を畏れ、刑を畏る。之を遁人と云
ふ。殺すべく、活かすべく、命を制するものは外にあり。
命に逆はず、何ぞ壽を羨やまん。貴を矜らず、何ぞ名を
羨やまん。勢を要せず、何ぞ位を羨やまん。富を貪らず、
何ぞ貨を羨やまん。此を順民と云ふ。天下對なく、命を
制するは内にあり」と。これ全く内心に満足し、靜平を守
りて心を勞せず、体を外物の爲めに役せず、自己の運命

は自己之を制し、自意のままに獨立獨行せよとするもの
なり。其言や善し、然りと雖、其實は到底行はるべきに
非ず。若し壽を求めざれと云は、之れと同時に酒色も
之を求めざれと云ふを得べし。何となれば、同じくこれ
人性の欲なればなり。貨を求めざれと云は、楊朱の欲
する所の酒色は如何にして之を購求せん、貨無かる可か
らず。名位は以て吾人の意志を行ふに便利を與ふ。之を
有するは極めて好ましきことに非ずや。吾人が此く批評
の嚴を以て楊子の言に對するは蓋酷なり。何となれば楊
子の言は寧ろ哲學的精密に言はんとせしものに非ずして、
只世間の人々が此等四者を以て終極の目的となし、以て
此等の虚物にして、五官的快樂の實なることを忘るゝを

笑ひたるものなればなり。然り、快樂なきの生命はありとも何かあらん、苦痛の位は有りとも無きに若かず、名は虚物のみ、之れが爲めに苦しむものあらば愚なり、實は以て用を便せば足れり、之を蓄積するを目的とするは愚なり。之を以て楊子は此くの如きことを笑ひ、眞に歸へり、根本的討窮を爲して、世人の此四者の爲めに眞の快樂を忘るゝを戒しめしものなり、而して楊子は酒色を以て眞の快樂となす。これ快樂の簡單主義なり。

楊子尙ほ質朴なる快樂を唱へ、田夫野人の寡欲の生活を描きて曰く『田夫は坐殺すべし。晨に出で、夜に入り、自ら往の恒なりと思ひ、菽を啜り藿を茹ひ自ら味の極なりと思ひ。肌肉粗厚筋節崦急す、一朝處るに柔毛綿幕を

以てし、薦むるに梁肉蘭橘を以てせば、心瘖み体煩ひ、内熱てし病を生ず。故に野人の安んずる所、野人の美とする所、天下過ぐる物なしと謂ふ。昔し宋國に田夫あり、常に緇黻を衣、僅かに以て冬を過ごし、春に暨びて東作し、自ら日に曝す。天下の廣厦隩室、綿曠狐貉あることを知らず、其妻を顧みて曰く、日の暄かなるを負ふ、人知る者なし、以て吾が君に獻せば重賞あらんと。此くて田夫野人は自己の茅屋を以て豊屋となし、粗食を以て厚味となし、自己の妻を以て姣色となし、以て自ら満足す。人若し『豊屋、美服、厚味、姣色の四者あらば何ぞ外に求むるあらん。之を有して外に求むるは厭くとなきの性なり。厭くことなきの性は陰陽の蠢賊なり』となす。然りと

雖楊子は、何に由りて人欲は此等に止まり、其他を求むるは陰陽の盡賊なりとなすか。人欲一定せるものに非ず、人に由り時に由りて變化す。寧ろ人性を以てすれば、欲望は無限のものにして、決して眞に満足する時あらずと云ふべし。

(五)利己主義

楊子の學說の主要あるものは快樂主義なりと雖、楊子は其學說上第二位にあるべき利己主義を以て有名なりとす。これ孟子が攻撃したることあるを以てなり。

楊子は實に利己主義の狹隘なるものなり。若し人ありて楊子に問ふて『体の一毛を去りて以て一世を濟せば汝之を爲すか』と云ふことあらんには。楊子答へて云はん『世固

より一毛の濟ふ所に非ず』と而して反問して云はん『汝が肌膚を侵して万金を獲ることあらば汝之を爲すか』と。若し人之に答へて之を『爲す』と云はんには、楊子又問ふて云はん『汝の一節を斷ちて一國を得ることあらば子之を爲すか』と。茲に於て其人必ず默然たらん。楊子進んで云はん『一毛も積みて肌膚を爲し、肌膚積みて以て一節を成す。一毛固より一毛分中の一物なり。奈何ん乎之を輕んぜんや』と。然りと雖一毛と一体とは差別あるなり。一毛と生命とは大に異なるなり。若し一毛を以て天下を濟ふべしとせば、頭髮の十毛百毛何ぞ惜しむべきのあらん。身を殺すとも、吾人は時の要するに當ては、仁を爲すとも辭せざるなり。楊子は『我』と云へる觀念を殊更に、不自然に、

人[○]性[○]に[○]逆[○]ひ[○]て[○]狭[○]小[○]に[○]し[○]、[○]我[○]の[○]觀[○]念[○]が[○]、[○]此[○]五[○]尺[○]の[○]體[○]軀[○]以[○]外[○]
に[○]延[○]長[○]せ[○]ん[○]と[○]す[○]る[○]も[○]の[○]を[○]強[○]む[○]て[○]之[○]を[○]五[○]尺[○]の[○]身[○]體[○]中[○]に[○]壓[○]縮[○]
閉[○]鎖[○]し[○]て[○]立[○]論[○]せ[○]る[○]な[○]り[○]。我[○]の[○]觀[○]念[○]は[○]必[○]し[○]も[○]五[○]尺[○]の[○]體[○]軀[○]の[○]
み[○]に[○]限[○]ら[○]ざ[○]る[○]な[○]り[○]。父[○]母[○]、妻[○]子[○]、朋[○]友[○]、國[○]人[○]、天[○]下[○]皆[○]な[○]
之[○]れ[○]我[○]な[○]り[○]と[○]の[○]念[○]を[○]有[○]せ[○]る[○]人[○]な[○]き[○]に[○]非[○]ず[○]。而[○]し[○]て[○]此[○]く[○]の[○]
如[○]き[○]に[○]當[○]り[○]て[○]や、所[○]謂[○]我[○]一[○]身[○]は、大[○]我[○]の[○]細[○]小[○]な[○]る[○]一[○]部[○]分[○]
た[○]る[○]の[○]み、而[○]し[○]て[○]天[○]下[○]を[○]濟[○]は[○]ん[○]と[○]し[○]て[○]一[○]身[○]を[○]損[○]ず[○]る[○]は、
我[○]體[○]の[○]大[○]部[○]を[○]救[○]は[○]ん[○]と[○]し[○]て[○]小[○]部[○]を[○]損[○]ず[○]る[○]に[○]外[○]な[○]ら[○]ず、楊[○]
子[○]は[○]我[○]の[○]哲[○]學[○]に[○]通[○]せ[○]ざ[○]る[○]も[○]の[○]と[○]云[○]ふ[○]べ[○]し[○]。(二程子及び王[○]
陽[○]明[○]等[○]は[○]大[○]我[○]の[○]哲[○]學[○]的[○]觀[○]念[○]の[○]上[○]に[○]倫[○]理[○]學[○]說[○]を[○]立[○]て、大[○]に[○]
愛[○]情[○]を[○]説[○]け[○]り。吾[○]人[○]大[○]に[○]其[○]說[○]を[○]高[○]し[○]と[○]な[○]す。我[○]の[○]觀[○]念[○]の[○]
論[○]に[○]就[○]て[○]は[○]本[○]書[○]第[○]二[○]卷[○]程[○]子[○]及[○]び[○]王[○]陽[○]明[○]の[○]部[○]に[○]説[○]く[○]べ[○]し[○]。

(六) 提要

孟子が一度び輕卒にも楊墨を排したるより、後世之に雷
同して又其言の眞否を驗せずして、一樣に楊墨を攻撃せ
り。然りと雖楊墨は當時の大賢なり、決して一概に論ず
べきに非ず。且つ其説く所全く善なりと云ふ可からずと
雖、亦大に眞理あるを知る。况や孟子は實際楊、墨の所
説を知らざるが如きに於てをや。然りと雖吾人は云はん、
楊子の説は實は未だ倫理學的問題の中に入れるものに非
ずして、尙ほ心理學中の論と云ふべし。且つ學問的、説
明的と云はんよりも、寧ろ楊子自己の好む所の快樂を天
下に公告せしものと云ふべきなり。

大伴旅人卿酒の讚美歌

こゝに大伴卿の歌を引用するにさゝめ、評論は敢て試みざるべし。

○ 驗しなき物を念はずば一坏ひつぎの濁れる酒を飲むべかるらし

○ 酒の名を聖ひいでとおほせし古への大きいせし聖の言の宜しさ

○ 古の七ななの賢さこき人ども、欲ほりするものは酒にしあるらし

○ 賢さこしと物言ふよりは酒飲みて酔ひなきするしまさりたるらし

○ いはんすべせんすべしちに極まりて貴きものは酒にしあるらし

○ なか／＼に人とあらずば酒壺ひやうになりにてしがも酒にしみなん

○ あな醜みにくさかしらをすと酒飲まぬ人をよく見れば猿さるにかも似る

○ 價ひなき寶といふとも一杯の濁れる酒にあさま
さらめや

○ 夜光る玉といふとも酒のみて情こころをやるにあにし
かめやも

○ 世の中の遊びの道にさぶしくば酔ひなきするに
ありぬべからし

○ このよにし楽しくあらば來ん世には蟲に鳥にも
吾はなりなん

○ 生るれば遂ひにも死ぬるものなればこのよなる
まはたのしくをあらな

○ 黙もくし居て賢さかしらするは酒飲みて酔ひなきするに
尙ほしかずけり

明治三十五年一月二日印刷
同 三十五年一月十日發行

正價金二拾二錢

著者 木村鷹太郎

發行者 大草常章



印刷者 多田三彌

印刷所 惠愛堂

發行元 松榮堂書店

東京市日本橋區
橋町二丁目一番地

東京市日本橋區橋町二丁目一番地
東京市麴町區內幸町二丁目五番地